

第19回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

第19回
文芸思潮
エッセイ賞

エッセイ賞は明年もまた同じ要領で募集いたします。
どうぞ奮って皆様の作品を御寄せください。心からお待ちしております。

「文芸思潮」エッセイ賞

最優秀賞

「ガザに生きて」

下田ひろみ

(三重県津市)

二〇二四年度第19回「文芸思潮」エッセイ賞は、一三六篇の御応募をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。昨年よりかなり少ない数で、優秀作品も減少するのではないかと危ぶまれましたが、蓋を開けてみるとまったくの杞憂で、質も向上しているばかりか、優秀作の数も例年より多く、選ぶのに苦労するほどでした。優秀賞・奨励賞以上のレベルの高い作品が犇き合いたいへん密度の濃いコンテストとなりました。十代から九十代までの幅広い年齢層と同時に、地域的にもアメリカ、アジアなどから広く寄せられ、それぞれ貴重な体験や社会批評を込めた、豊かな内容となりました。

例年の通り、まず予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、さらに選出された最終作品を対象に、水木亮、都築隆広、五十嵐勉三人の選考委員によって八月四日山梨県甲府市において最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞作品を発表させていただきます。以後奨励賞も誌上に掲載させていただきます予定です。

優秀賞

「プラハの街角にて」

深山彌生 (千葉県船橋市)

「母の満州」 中田重頭 (三重県熊野市)

「ひと夏とイルカと」

高たかよ (愛知県名古屋市中)

「南北之塔」 青地久恵 (北海道釧路市)

「ひとつの約束」 小林宏子 (北海道札幌市)

「みそまんじゅう」 瀧沢鈴 (北海道函館市)

「西日」 宮尾美明 (愛知県愛西市)

「『団子ちゃん』は何者?」

林 須磨 (京都府宇治市)

「乳を取る」 三浦みな子 (島根県出雲市)

奨励賞

「背筋」 中村郁恵 (北海道札幌市)

「灰香」 桜藤 伸 (千葉県千葉市)

「運命を生き抜いて」 豊代恵子 (石川県金沢市)

「地獄で生きている」 青田雪生 (徳島県徳島市)

「土葬、遙かなる」 丹波藏堂 (愛知県江南市)

「回想録、夜の街」 柏村ねお (宮城県仙台市)

「遺伝性疾患に苦しむ我が子ジャーマン・シェパード」

村松佐保 (群馬県吾妻郡)

「大統領選挙を控えて」

荘百合子 (米国ヴァージニア州)

「歴史を紡ぐ麦」 勝山 稔 (宮城県仙台市)

「前を向いて生きる」 いっちゃん (岐阜県羽島市)

「ロバのパン、追いかけて」 今井清賀 (大阪府和泉市)

「不思議な体験」 田中美晴 (大阪府豊中市)

「いのち」 佐藤邦夫 (茨城県神栖市)

「運命の一手」 地伊田月夫 (岡山県岡山市)

「引き揚げ船の悲劇」 西島雅博 (福島県いわき市)

選評



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ
79「流瀆の島」で群像
新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売
新聞・NTTプリンテック
主催第1回インターネット
文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館
文学賞受賞

ハイレベル目白押し

五十嵐勉

第一九回の文芸思潮エッセイ賞は、応募総数が昨年の一七三から一三六と減ってしまった。その事情から、いい作品の数も減っているのではないかと大いに心配したが、蓋を開けてみるとそんな心配は吹き飛んでしまった。むしろ昨年よりも優秀賞・奨励賞レベルの作品が多く、いい作品が目白押しで、うれしい悲鳴を上げたほどだった。前回以上にどれを落とすか、どれに泣いてもらうか、悩む事態となった。

最終選考はいつも5点法で採点される。5点は最優秀賞、

4点台は優秀賞、3点台は奨励賞、2点台は佳作、1点台は入選、それ以下は選外となる。集計して選考委員の合計点の高い順から並べていくのがいつもの方法だが、普通に考えたと選考委員三人（今年も三神弘選考委員が病気のため欠席）の合計点が9点なら、奨励賞に値する評価と言える。ところがこの合計9点以上の作品はなんと53作品あった。少し基準を上げて合計10点（平均3.3点）以上はどうかと見てみるとこれも39作品ある。また私個人で4点以上を付けて優秀賞でも可とした作品は、何と22作品あった。評価はけっして甘いわけではなく、「文芸思潮」に載せられるかどうかという点ではかなり厳しい。それにもかかわらず、これだけの数の作品が高得点を得ているということは、驚異であり、いかにハイレベルか実感される最終状況だった。いきおい、奨励賞の数が多くなり、優秀賞の数も多くなることが予想された。

そういう中での本選考で、まず当選作を第一にずばり決めるのだが、こちらはのっけからすんなりとはいかなかった。私は下田ひろみ氏の「ガザに生きて」を第一に推した。この作品は、今パレスチナで起きている戦争に深く踏み込んだ内容で、自身が九〇年代にガザで教えた音楽授業を通して、そこで触れ合った人々との繋がりと体温から、現在の悲劇と希求を立ち上げている。イスラエル通過のビザ記

幕臣たちの肖像

室田耕平



「オンリー・イエスタデー」米山哲雄（山梨県甲斐市）
「イヌワシとクマタカ」松浪丞（新潟県村上市）
「サボテンの花」姉齒浩一（東京都八王子市）
「爺のお宝」竹浪和夫（青森県むつ市）
「ひたむきな、余りにひたむきな」三鶴（静岡県御殿場市）

「医者に匙を投げられて」森崎律子（大阪府大阪市）
「学生と共にコロナ禍と闘った日々」和泉勇希（大阪府枚方市）

「煎茶道と私——売茶翁との出会い——」

中牟田桃園（奈良県橿原市）

「第二の誕生日」ラッダ政美（兵庫県神戸市）

「西別川源流の自然」塚田伸幸（北海道釧路市）

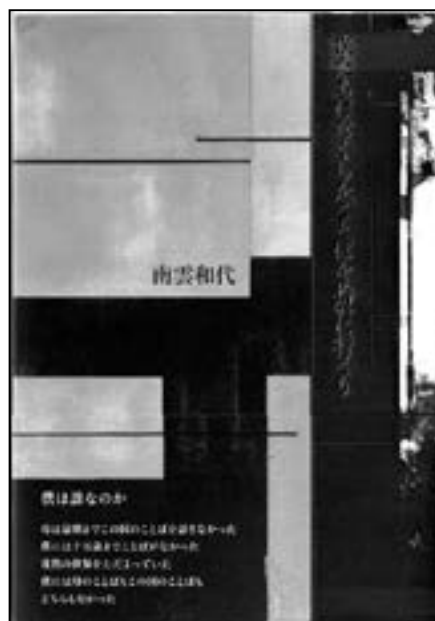
「夫婦は相身互い」内藤栄介（東京都新宿区）

「鳥の道」矢野吉晴（青森県青森市）

「心の帰港地」杉本宣子（京都府福知山市）

「もう少し早く戦争が終っていたら」

葩島彊子（北海道札幌市）



録があるとヨルダンなど中東諸国には入れないとか、アメリカのイラク攻撃の際の報道がいかにも信じられないものであったとか、実際にそこに踏み込んだ者でなければ書けない叙述は、強烈なりアリティがある。筆者がヨルダン經由でパレスチナに入り、そこで教えた音楽によって得た人との繋がりは、生身のものとして共鳴する。そしていまイスラエルからの理不尽な攻撃でガザが破壊されつつあるとき、そこで教えた聾学校や人々はどうなっているのか、その人間同士としての繋がりを元にした憂いと怒りは激しく心を揺さぶってくる。人間としての真の絆と怒りがここにはある。平和への基盤となるものがある。私はこれに満点の5を付けて強く推挙した。

他の選考委員が躊躇したのは、現在ガザが戦争の渦中にあり、報道の洪水に曝されているためあまりにタイムリすぎて迎合的に見える点、また最後の部分に俳句があり、これが全体のドキュメント性と合わないのではないか、という二点であるが、ここに書かれたリアリティと平和への希求の痛切さは本物であり、あくまで実体験に基づき、流動的、一時的なものではけっしてないこと、また俳句は稚拙であり、作品として整合しないが、そのぎこちなさの中にむしろ溢れる真情が率直に伝わってくることを理由に、主張を貫いた。なんとか納得してもらってよかったと思っているが、この筆者の体験に根ざした痛切な訴えには、万

ている。

私が最優秀賞に近い高得点を付けたのは松藤仲氏の「灰香」である。この作品は深く愛した一〇〇歳の祖母の死と収骨までを描いたものだが、死に際の祖母とのやりとりも克明で「焼かれたら熱いだろなあ……嫌だなあ」「死んだら終わりだあ……」という言葉聞きながら、なぜだかわからないが「勝手に体が動いて」祖母の髪を鋏を当てて切り取り、「携帯のカメラに祖母といっしょに手を繋ぎ写真に収めた」。そしてそのあと二、三〇分であっけなく祖母は息を引き取る。生と死とを分ける最後の幕切れもさりげなく自然で、しかも死を漠然と感じて体が動くそれが、意識下の深い命の感受を体現している。そしてその祖母の骨を焼いたとき、そこから漂う骨の匂いに祖母の懐かしい匂いを嗅ぐ。それは、深い愛着を覚える者だけに届いてくる骨の匂いだった。ここには、祖母への深い愛が漲っており、祖母から孫へ伝わる確かな命の絆がある。それは命の相として大事なものを現代に突き突き付けてくることを実感した。奨励賞に留まったが、私の評価は高く、尊いものを宿していると思った。

優秀賞の中田重顕氏の「母の満州」は二歳で満州を引き揚げてきた筆者が母の満州での姿を求めて、渡満し追懐するエッセイである。満州の白亜の病院で自分を産んだという母の文章を頼りに、その辺りを訪ねるが、茫洋として、

人の胸を揺さぶる真情がある。多くの人に読んでもらいたい作品である。

今回のコンテストには海外ものが目立った。深山彌生氏の「プラハの街角にて」は、一九六八年のチェコスロバキアの民主化をソ連軍が侵入・弾圧して抑え込んだ事件を追体験するために、現地を訪れて当時を触感する内容だが、ここには単に野次馬や傍観者に留まらない特別な情熱の滾りがある。ストーリーの流れは当時のプラハの民主化を現地で書き留めた春江一成著「プラハの春」に感動し、それに触発されてチェコの現地に赴くのだが、弾圧され、抹殺される事件が、最終的に二十数年後ベルリンの壁の崩壊によって実現される、歴史の深い相を体感する感動に繋がっていく。書き残された言葉が生命力を持って再生され起き上がってくるところに、このエッセイの歴史に向かい合う雄勁な力がある。「命をかけて真実を語る言葉は無敵であり、永遠の力を持つ真理となる。言葉は魂だ」「既成権力によって立つ権力基盤を脅かすものを過酷に弾圧し、排除しようとする。しかし歴史の流れにおいて永遠なる権力はない」「一つの書物がこのように人の心に深刻な印を残し、現地に足を運んでさらにその志向ベクトルを深めようとする力を育むものであることにも驚きとともに信頼を湧かせてくれるが、筆者がこれらを通して歴史の深い相貌を体で感じたそのことに、意義があり、ここにその感動が鳴り響い

広い満州の緑野に記憶が溶けかかる。案内の中国女性の反発的姿に重なって、何かが見えてき、何かが溶け消えていく。むしろそこに茫漠とした満州の姿が立ち上がってきて、戦争の時代の果てしなさに埋められていく。夢幻に溶けていく平原と時間に、母親への郷愁と満州の実感が鮮やかに浮かび上がってくる味わい深い作品だった。

青地久恵氏の「南北之塔」もおそろそかにできない濃い内容を有している。これは沖縄戦で戦死した北海道出身の兵の慰霊塔に詣でる話だが、沖縄戦でこれほど北海道の人々が戦死しているということも知らなかったし、そのための供養の塔までが立てられているということも初めて知った。アイヌの人たちを含め、北から南へ移ってそこで果てた北海道の人たちを供養し続ける心にも打たれ、今でもはるばる詣で、当時への思いを深くする人々の存在に、畏敬の念を覚えた。犠牲者の思いを汲み取るうとするその深い心が胸に深く刻まれた。

同じく優秀賞の高たかよ氏の「ひと夏とイルカと」は、水族館のアルバイト体験を記したものである。水族館を内側から描いたものはこれまでになく新鮮で、何種類ものペンギンやタツノオトシゴ、タカアシガニなどだけでも珍しい上に、イルカのダイナミックなショーがある。それに身近で接する密着的な感動が鮮やかに伝わってくる。「イルカたちの目の前まで寄って行った。すると今度は、イルカ

たちがキューキューと、途切れることなく声を出していることに気付いた。一枚のガラスを隔てて、自分とイルカだけが対峙するという初めての体験。私が立ち去るまでイルカたちはその場から動くことなく、ずっとこちらを見つめて声を出し続けていた」というシーンは、イルカの人に寄せる思いが伝わってきて、いじらしくなる。「こちらに寄ってきて、こちらを見つめて何をしてるのか」とさらに問うそこに、イルカの生きている存在を受け止める温かみがある。自然と生命への交感が伝わってくる作品だった。

小林宏子氏の「一つの約束」は、ニューギニア戦へ向かった父親の遺言「私が死んだら高野山に骨を収めてほしい」を七十九年後に果たすストーリーで、母親も兄も果たせなかったその遺言を、当時一歳半だった自分が果たすことになる。三十七歳で戦死した父親と一〇一歳まで生きた母親の二人の写真を納骨の手続きを通して納めるわけだが、そこに覚えた「やっと両親と一緒に眠ることができる」という感慨は深いものがある。「花の生命力に自分を宿して雑草のように生きてこれたのは、父の熱い願いだったと思う」と死者と心を通わせそこから生きる力を得る構造は、目に見えない普遍的な力に通じている。

今回は高齢者も大活躍だった。優秀賞の「団子ちゃん」は何者?」の林須磨氏は九十一歳、「みそまんじゅう」の

瀧沢鈴氏は九十七歳である。この年齢になってもこれだけのしつかりした、しかも味のある文章が書けるということは、我々にも勇気を与えてくれる。「文芸思潮」の読者にも励みになるはずである。

「団子ちゃん」は何者?」は、娘とともに老人ホームに入居するが、それ以前からあった娘の腹部の「脂肪肉腫」が変化し始める。最初は「良性」だったが、やがて「悪性」と診断される。その得体の知れない異物を「団子ちゃん」と呼んでいたものの、しだいに悪化し手術が必要になる。精神的に荒れた一時期を超えて結局手術を受け、うまく成功するのだが、最後までその肉腫を「団子ちゃん」と擬人化し「団子ちゃんはお行儀がよかったんだね」と明るく褒めるところに、筆者の温かみが匂ってくる。筆者でなければできない、事態を明るくする捉え方は大きな救いになる。「みそまんじゅう」は函館のお台場を舞台に繰り広げられるドラマである。いつもひっそりと港の踊り場でみそまんじゅうを食べていた学生が、あるときから突然見えなくなった。ほどなくしてその学生の両親が突然訪ねてきて、その学生が肺結核で亡くなったこと、お台場のそこを自分のお気に入りの場所「台場基地」として、いつも楽しんでいたことを告げた。お台場の変化に何十年の時の流れを乗せて浜風が吹き寄せる無常感、独特の味わいがあった。

奨励賞にも海外の生活からの視点が反映されていて、「大

統領選を控えて」(莊百合子)は、日本では感受できないアメリカの大統領選の空気が伝わってくる。ここにさりげなく入れられた「万民のための自由と正義」という言葉など、日本ではけっして現れず使われない発想で、こうしたところにアメリカの民主主義の土台があることもよく届いてくる。また同時にその理想を掲げながらも、現実の複雑なしがらみや泥沼から抜け出せない病める現状も窺われる好レポートになっている。

異色なのは「煎茶道と私」売茶翁との出会い(中牟田桃園)と「回想録『夜の街』」(柏村ねお)で、どちらもその道の徹底した姿勢に、貫きが華を咲かせている。表面きは逆の世界だが、一途な情熱を、一方は狭いひとときの空間に、一方は華美だが、献身による明日への慰安に、貫徹させるその姿勢に、研ぎ澄まされた心の美が宿る。どちらも実際に味わってみたくなる魅力が醸し出されていた。

先の戦争に関する作品は奨励賞に三つあり、「もう少し早く戦争が終わっていたら」(配島強子)と「引き揚げ船の悲劇」(西島雅博)はどちらも戦争直後の引き揚げの状況や事情をよく伝えていて、胸に迫るものがある。「引き揚げ」という言葉はだれもが知っていて、外地から日本へ戻ってくることは、頭では理解できても、その実情はなかなかイメージできないが、この二作は当時の状況をありありと浮かび上がらせてくれる。その筆致の裏に戦争への怒

りと憎しみが湛えられており、いつそう鮮やかな刻印となって胸を打ってくる。配島氏が「もう少し早く戦争が終わっていたら」という後悔と告発に繋げるのも説得力があるし、西島氏の描く春子の悲劇も切迫力がある。ただ、西島氏の作品は小説的な色がやや濃くなっているのが気になった。もう一つの「背筋」は、シベリア抑留の義父が持ち帰ったスプーンに当時の強制労働の苛酷な生活を投影させているものだが、スプーンの佇まいに宿る象徴は鮮やかであるものの、肝心の抑留生活そのものがほとんど伝えられていないのは、片手落ちであるように思われた。

生命に関するエッセイはやはり常に感動を呼ぶ。「いのち」(佐藤邦夫)は我が子という新しい命への誕生を素直に表現していてみずみずしいし、「遺伝性疾患に苦しむ我が子ジャーマン・シェパード」(村松佐保)は、犬と同体の愛情の濃さが胸を打ってくる。命は種を超える共感であることが理解される。「第二の誕生日」(チキータ)も生と死の境のきわどさ、尊さを認識させてくれる。

「心の帰港地」(杉本宣子)は、北朝鮮へ帰らない道を選んだ女性の、「私の魂の還る場所はどこにあるのか」と問いつつ、育った新潟の地を訪れる回想は、深い穿ちが普遍的な響きを奏でて届いてくる。心に染み入るものがあつた。自分の心を探るものとして、それとやや反対に位置する「サボテンの花」(姉菌浩一)も屈折した心模様の中に深い味

の残る作品で、曲折する自分の心理の向こうに佇む生きる植物の姿が何とも言えない対峙を示していて、生きることを見つめ合う共感を醸している。

大きな自然へ眼を向け新たな発見と認識を伝えているものがいくつもあり、あらためて感動を覚えた。「歴史を紡ぐ麦」(勝山稔)は、麦という品種の生態を普段捉えない角度から照射して、人間が飢餓から解放された原点を知る思いがした。「西別川源流の自然」(塚田伸幸)も、北海道の川の源流に鮭・鱒の稚魚を小学校の子供たちと放流する話は、清冽な自然が新たな相貌で広がって、大きなものに育まれているこの世界を開示してくれる。貴重なエッセイに心が洗われる思いがした。最後の「森と川が豊かで、そこに住む動物が守られていなければ、我々人間の生活も守られない」という言葉が身に染みる。

またこの領域に属するものとして「イヌワシとクマタカ」(松浪丞)「鳥の道」(矢野吉晴)も、大自然の中で生きる動物の鮮やかな姿が描かれていて、厳しさの中で息づく命の大きな営みを感じさせられた。「鳥の道」は渡ってくる白鳥の生態を、身近な近隣者として付き合う様子を綴ったものだが、広大な自然の中での触れ合いは白鳥に親しみを覚えさせ、その厳しさの中で生きる姿に感動を喚起する。またそのことは、真に畏敬すべきもの、尊ぶべきものを教えてくれる。こうした自然への素直な感受が失われ

るとき、文明や現代文化は腐食衰微の道を辿るだろう。その意味でも、こうしたエッセイが寄せられてくることは、大いに喜ばたいし、歓迎したい。

奨励賞には不運にも届かなかったが、いい作品、心に残る作品、ぜひ文芸思潮誌上に乗せて多くの人に読んでもらいたい作品は少なくない。「前途晴朗なり」(小倉一純)「白鳥の歌」(白葡萄)「サントーシヤさんと話して思う事」(宮原真希)「ロンドンにあえて幸せ」(壬生智恵)「墓場の前の別荘」(林英二)「日本の心」(新垣景和)「ノアガーデン」(エリザベス)「栗山佳子」(似て非なる二人)「柴田節子」(八十路の戸惑い)「ゴルビー長田」(人生の勲章)「澤井樹生」などは、スペースがあればぜひ載せたい作品である。現代は、機械化、自動化が進み、年々人が他人のために動き、自ら働いて助け合う空間が狭められている。人間が機械に使われるようになりつつある。命は一回きりのものであり、取り換えのきかない軌跡であることを思うとき、振り返ることの中に深い意味を見出すことは、命に意義と価値を見出す一つの尊い行為であることを信じる。このエッセイ賞がその一つの縁になることを願っている。



佳作

「安倍家三代記」	相模次郎	「義母終のことば」	家森澄子
「父と猪」	富登千恵子	「猫と神」	みな熊々
「息子の入院」	大杉 綾	「すてきな星」	田中 修
「母の祖」佐佐木吉田厳秀「の里を訪ねて」	田浦チサ子	「白鳥の歌」	白葡萄
「がんのこと、お子さんに伝えますか?」	秋谷 進	「前途晴朗なり」	小倉一純
「世のため人のため」	高浜富士夫	「でこぼこ」	山田 牧
「聖バレンタインの贈り物」	平野靖雄	「ノアガーデン」エリザベス」	栗山佳子
「性欲の強い店主」	ふきのとう	「似て非なる二人」	柴田節子
「墓場の前の別荘」	林 英二	「ミッションスクール育ちが寺に嫁ぐと」	森下文乃
「あぶくとはいわせない」	高尾周一	「太宰先生のお膝元」	山田まさ子
「それでも生き抜こう」	佐高 源	「暇つぶし」	佐久間隆史
「私を彩るもの」	福山由美	「玄関を、飾る」	風蔭きやん
「日本の心」	新垣景和	「静御前と小さな鉄瓶」	武藤養子
「誤信信仰」	秋葉みのり	「八十路の戸惑い」	ゴルビー長田
「サントーシヤさんと話して思う事」	宮原真希	「人生の勲章」	澤井樹生
		「レターラックに佇むスイカと波」	小原友紀
		「ロンドンにあえて幸せ」	壬生智恵



みずき りょう

作家・劇作家・演出家
1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で
第16回織田作之助
賞受賞
2006 小説「お見合いッ
アー」で第49回農
民文学賞受賞
戯曲も多数ある

シニア世代の大切な記録

水木 亮

今回も年齢的に幅広い応募エッセイであった。
応募作品を見て、九〇歳を超えてなお挑戦するエネルギーに驚かされる。大切なことだと思う。またいろいろな職業を退職された方のエッセイも、退職後の試みとして文章に改めて挑戦する意気込みを感じる。太平洋戦争を直接また間接的に経験された方の、遺言とも言うべき貴重な体験を、エッセイにまとめて発表することは意義深い。いろいろなエッセイを読むことができて、私は自分なりに学びをすることができた。学ぶことは新しい発見があり楽しい。次回も皆さんの元気なエッセイを期待している。

優秀賞から見てゆきたい。

三浦みな子さんの「乳を取る」は、全体的に文章がうま

が義父の記録は空白になっている。その過酷な思い出を象徴する義父使用のスプーンを書いていて、悲しみが伝わる。

西島雅博さんの「引き揚げ船の悲劇」は、同世代を生きた人間が生きているうちに書かねばならぬことを書いた。エッセイとは異なり小説風に書かれている。どちらかに徹するとさらに良いだろう。

今井清賀さんの「ロバのパン、追いかけて」は楽しいエッセイで心が和む。

その他記録しておきたい作品をあげてみたい。

いっちゃんさんの「前を向いて生きる」。精神病が発症の妻を、苦勞しながら介護する姿を書いた。改行が一度もないなど、文章上の問題は学べばわかることだが、それほど一氣に書いているところに、書き手の強いリアルな思いを感じるのである。この作品に共感する人がいることを信じて頑張っ

てほしい。
内藤栄介さんの「夫婦は相見互い」は、体を病んでから結婚し、今度は妻が事故で病むことになり、寄り添う姿を書いた。苦境にある人々を励ますエッセイである。

武藤養子さんの「静御前と小さな鉄瓶」は、満州で暮らした伯母の思い出がここに残る。

幸村篤さんの「春の愁い」は里親と里子の想いが書かれている。

村松佐保さんの「遺伝性疾患に苦しむ我が子ジャーマ

かった。一生懸命に生きたが癌になった、その手術中のいろいろな想い、女性の生きざまがリアルに描かれていて心が伝わる。
高たかよさんの「ひと夏とイルカ」は、アルバイトで経験したイルカを書いた。題材はともよいと思う。ただ、もう一息イルカとのかかりについて追求性が欲しいところである。

瀧沢鈴さんの「みそまんじゅう」は九七歳の方が書いている。不運な若者の思い出であるが、この内容は、作者が生きているうちに是非書いておきたい記録でもあったと思う。こうして作品となり、若者も浮かべられると思う。

宮尾美明さんの「西日」は毎年応募されている方の作品だが、老いてこそよくわかる、旧友との黄昏の別れがしみじみとよく書かれている。

青地久恵さんの「南北之塔」は、あまり知られていない、アイヌの沖縄戦死を書いていて貴重な記録であると思う。

中田重顕さんの「母の満州」は母と満州の記憶を書いた。作者が現地を訪れていることがリアルで、読ませる。

小林宏子さんの「ひとつの約束」は戦死した父親への約束を、歳月を経て母親の代わりに果たす内容である。作者はこれをもって安らぎを感じたことであろう。

奨励賞を受けた中村郁恵さんの「背筋」は、義父のシベリア抑留とその後の生き方を書いた。一番きつい時のこと

ン・シエバード」は愛犬を亡くした切ない想いを書いている。

高齢者のたそがれの日々をどう生きるか。そのなかにあって、私は演劇を生きがいとして生きてきた。私は山梨県に関する歴史上の事件人物を自分で戯曲化し、五〇年以上上演劇として上演してきた。ところが八〇歳を超えて、体力的にいろいろ制限も出てきた。そのなかで、「文芸思潮」のエッセイコンクールの作品に触れることはとても刺激になる。そこには、「動けるうちに動く」「書けるときに書いておく」という高齢者の作品や、病氣など社会的に厳しい環境で創作している作品が多く見られるからだ。それらの作品に力点を置く「文芸思潮」は日本の文芸誌では特別だと思う。そろそろ百号を迎えるそうだが、そういう高齢者を大事にする文芸誌が日本にあってもよい。来年もみなさんの多くの作品が寄せられることを期待している。



御注文はアジア文化社まで

入選

- | | |
|------------------|-------|
| 「かわりばんこ」 | 斎藤はな絵 |
| 「都会の墓地」 | 太田 悠 |
| 「こんにちは 赤ちゃん」 | 九条之子 |
| 「白いネクタイ」 | 団周五郎 |
| 「長瀬肯定論―猿一匹、歌え侍―」 | 薩摩 |
| 「トイレのなかのおばさん」 | 椎木友理 |
| 「泡となって」 | 阿彦美咲 |
| 「春の愁い」 | 幸村 篝 |
| 「よっちゃん」 | 安部としき |
| 「長い旅」 | 西尾 吉 |
| 「就活について」 | 柳川 隆 |
| 「『山の上ホテル』休業によせて」 | 牧 康子 |
| 「生命の多様性と永続性」と | 酒井恵三 |
-
- | | |
|----------------|--------|
| 「故郷は、永遠なり」 | 佐藤悦弘 |
| 「青女」 | 長坂弥生 |
| 「ラジオの魅力」 | 野宮健司 |
| 「義母と水ようかん」 | せがわけいこ |
| 「ファルセットに恋をして」 | 堤 洋子 |
| 「蘇鉄の花に想う」 | 天城 嘯一 |
| 「リボーン」 | 松尾なおゆき |
| 「僕とマウスピース」 | 川和真之 |
| 「胡蝶蘭とスマイル」 | 佐生綾子 |
| 「私、これからどうしたい？」 | 古池真矢 |
| 「閑さされた家の中で」 | 野間瑠希心 |
| 「胡蝶蘭が咲いた休日」 | 沼田識史 |
| 「ベルリン」 | 風間麗子 |



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第
91回文芸界新人賞受賞
「狼を見る」(文芸思潮)
「ご眷属様ジャーニー」(三
田文学)他「長者屋敷の寝
られぬ座敷」(合作)で佐々
木喜善賞など 構成作家と
しても活動中

迷ったら、モンテニューへ立ち戻れ

都築隆広

下馬評が高かったというか、単純に審査員達の合計得点が高かったのは奨励賞「背筋」だった。しかし、実際に最優秀賞となったのは、二番手三番手についていた「ガザに生きる」だ。採点表では高得点をつけている作品が、意外や最優秀賞になれなかったりするもの、この選考会の恒例となりつつある。私も「背筋」には高得点を付けたものの、「ガザに生きる」が競り勝ったことに、反対はしなかった。義父のシベリア抑留について語った「背筋」は普通の家庭に残った、生々しい歴史の傷痕といった物語である。ただ、作中でキーとなるアイテムは義父がシベリアから持ち帰ったスプーンであり、「どう考えてもタイトルは『背筋』じゃ

なくて、『スプーン』だろ」というツツコミは回避できなかった。

一方、「ガザに生きる」の方は社会批評賞ジャンルだと推察し、これを通常のエッセイと同列に語るのはアンフェアなようにも感じた。しかし、五十嵐勉選考委員の「体験談なのだから、これは通常のエッセイとして扱うべきだ」という弁に納得させられた。こちらが積極的に推せなかった理由は、結末の重要な部分で俳句が出てきてしまう点だった。一つ一つの句は真摯で、雑音にはならないものの、重要な部分は他の表現手段ではなく、エッセイらしく、地の文で語って欲しかった。

次に優秀賞の「乳を取る」。乳癌手術を受ける女性の話で、なんといっても、ノースフェイスのパーカーを死神が着ているという場面が現代的で痛快だ。冬に新宿駅の改札を通れば、やたら値段が高い、このアウトドアブランドの服を纏いし都会人共がアルタ前を闊歩していることだろう。山梨キャンパーたる私からしたら、「東京で、その防寒性能は無用の長物であろう」と唇の端から嫌味が零れ出るも、よもや死神まで着用するようになったとは滑稽の極みだ。勿論、それ以外の育児や病気の部分も、リアリティーがあって読ませる。

同じく優秀賞の「ひと夏とイルカと」。実は私が最も支持したのはこのエッセイであった。なかなか覗き見ること

「文芸思潮」編集部員募集
有給 大卒以上／要編集経験・文章力
履歴書送付 編集部まで

第20回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしのなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

趣旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格）。

応募規定●4000字以内。極力パソコン印字で。※応募原稿は返却しないので、コピーを取り、コピーの方を送付すること。パソコン・ワープロ原稿は横長A4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。

別紙に①応募部門（2025第20回「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④ふりがな（どちらにもふりがなを）⑤年齢・生年月日・性別⑥住所〒（必ず郵便番号を明記のこと。ないものは失格）⑦電話番号⑧職業・略歴※①～⑧でこれらが厳守されていないものは失格となる。

応募審査料●1800円を郵便為替（郵便局で購入）で同封のこと（為替には無記入・無押印）。外国からは14USドルを同封。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

賞●最優秀賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名は7万円／3名は5万円）

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品

選考委員●三神弘・水木亮・都築隆広・五十嵐勉

締切●2025年3月31日（当日消印有効）

発表●予選通過作品発表は2025年6月25日発売の「文芸思潮」96号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終結果・最優秀作および優秀作は2025年9月25日発売の「文芸思潮」97号に発表掲載。奨励賞も順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、あなたの真の声を乗せたエッセイ作品をお寄せください。



ができない水族館のバックヤードを描いた作品だが、実は要素のみを抜き出すと、単に夏休みにアルバイトをしたというだけの話である。エッセイの審査をしていると、「大変な体験をしたもの」か「大変な病気にかったもの」かの題材で、上位陣が占められてしまう。「ガザに生きる」は前者であり、「乳を取る」は後者である。「背筋」は「体験の伝聞」であるがゆえに、選考会では二者に競り負けてしまった。それだけ「体験」と「闘病」、そして「死」というテーマは、現代日本でエッセイを書くにおいて避けては通れない三大要素といえよう。「ひと夏とイルカと」も「水族館」という特殊な環境でのアルバイト「体験」が主軸になってはいるものの、そうはいっても「アルバイト」である。特殊過ぎない「体験」をセンス良く、カラーージュしている点が評価できた。

可愛いタイトルの優秀賞「『団子ちゃん』は何者？」は娘の脂肪肉腫を切除するという、全然、可愛くない内容で、闘病記を明るい文体で語った手腕には脱帽である。同じく優秀賞「西日」は絵画教室で出会った親友が認知症にかかる話。ラストのくだりがかなりドラマチックだった。私も学生時代に絵画教室に通っていたので、共感しながら読んだ。優秀賞「みそまんじゅう」は古き良き函館の風景と、あたたかな人間ドラマが描かれる。

さて、世の中は不思議なところで、ヘーゲルの弁証法や

「超ひも理論」については理路整然と説明ができて、「駅からコンビニに寄って、弁当を買って家に帰ってきた」というだけの出来事を上手に語ることができない人も少なくはない。その逆もまた然りで、難しいことは書けずとも、当たり前のことを当たり前に語れる人もいる。インターネットの発達によって、前者が増えているように感じるが、エッセイというジャンルにおいては、断然、有利なのは後者の方だ。

清少納言や兼好法師を除くと、世界で初めてエッセイを書いたのは、フランスの下級貴族、モンテーニュといわれている。彼はエッセイの語源にもなった「エッセー」（原二郎訳、岩波文庫）の序文で、将来、死別するであろう身内のために、ありのままの自分について書いたとし、「読者よ、このように私自身が私の書物の題材なのだ」と述べている。エッセイに限らず、創作全般において、伸び悩んでいる人は外部に題材を求め過ぎているきらいがある。そういった時には、このシンプルなモンテーニュの言葉を思い出し、一息ついてみるのも一考なのではあるまいか。



ガザに生きて

下田ひろみ



一九九四年、五月。ガザの空は青く広がっていた。ヨルダンから、アレンビーブリッジを通り、イスラエルを通過する私のパスポートには、イスラエルへの渡航歴はない。パスポートにイスラエルの入国を示すものが残されると、再びほかの中東の国に入ることができなくなってしまうからだ。特にイラクには。

九一年の湾岸戦争直後のイラクを訪れた時から、私はそれまで信じてきたテレビや大手新聞の報道を信じることができなくなっていた。そこで起きていたものを目の当たりにしたとき、情報操作というものの恐ろしさを知ることになる。イラクVSアメリカを中心とした連合国。二つの情報メディアで流されたとき、ほとんどの人が西側の情報だけを鵜呑みにした。もちろん、私も。そして訪れたイラクで目にしたものは、破壊されつくしたインフラと、誤爆と言われ続けたすべての病院に対する爆撃の痕、周りの風景

さえ映されていれば、これが軍事施設でないことが明らかにわかるはずの狙い撃ちされたアメリカシエルトー。いったいこれは何？ どういうこと？ こんなことが次々と明るみになっていく。

当時、南部ではコレラが流行っていた。破壊された上下水道の浄化システムが状況を悪化させていた。発電所も爆撃され送電線もズタズタで、電気は来ない。毎日真っ暗な夜を過ごした。部品も調達できないし、すべてのジェネレーターが何発もの銃弾を浴びているので、何個かの部品を集めて一つを作るということも不可能だった。ジェネレーターが動かなければ、わずかに国連から届くワクチンも無駄になっていく。

日本を発つ前にイラクの病院からTELEXで届いたSOSを翻訳していて、知り得た情報は少なかった。血液製剤が足りないこと、抗生物質が入ってこないこと、電化さ

れた病院機能が麻痺していてこのままだと感染症が止められないこと。行ってみないと何もわからない。

個人で救援活動に入った自分にできることは限られていたが、志を同じくする人たちと一緒にイラク全土の病院を見て回り、ヨルダンで買付けた薬を渡していく。

なぜヨルダンで？ それはもちろん、イラクには薬は全く入ってこないから。

経済封鎖という名のもとに、食料も薬もすべてのものが凍結されていたからだ。

国家プロジェクトでも何でもないグループの救援活動だったから、手渡すわずかな薬は、そこに収容された瀕死の子供たちの命をたった一日引き延ばすに過ぎなかった。

それでも親にとつて、子供の命はたとえ五分であろうとも長くあつてほしいものだったろう。「シヨコラン」^{ありがとう}何度その言葉を聞いたことか。私は何もできなかった。私が与えたものよりも、はるかに大きなものを彼らからもらった。

イラクは国が所有する潤沢な石油から得られる財源を使って、国の隅々までハイウェイのような道路を整備し、上下水道はもちろん電気も小さな村に至るまで配備した。そして、訪れて初めて知ることになったが、教育や福祉に力を入れていた国家だった。

フセイン元大統領は、西側サイドによって悪の権化のような印象を形作られた。確かに独裁的なところはあったの

かもしれないが、賢く立派な統治者だったのだと思う。だからきつと、西側が彼のリーダーとしての才能を恐れて抹殺したのだろう。教育こそ国の力と信じた彼の統治下において、文盲率は著しく下がった。すでに家庭に入っている女性が学び直しやすいうにと、すべての大学には託児所が備わっていた。そして男女の区別なく、大学卒業まではすべての国民が無料で教育を受けられた。

さらに驚くことには、当時、教師のほぼ半分近く、医師の三割ほど、歯科医の半分弱、薬剤師の七割を、女性が占めるようになっていた。それが、彼の政治姿勢の何よりの証明だろう。他の中東におけるイスラム社会とは女性の立場がまるで違う。これは国家の方針なしには考えられないことだから。

湾岸戦争が始まった時、フセイン元大統領が繰り返し言っていた「ダブルスタンダード」——この意味が本当の意味で分かるようになったのは、九四年から九八年まで実際にガザで過ごすようになってからだ。

二〇二四年の今、ガザとイスラエルの間で起きていること。これは戦争というにはあまりにもひどい。虐殺と呼んでいい光景を日々、映像で目にしている。

現地にいない自分が、何を信じるのか？ イラクで一

緒だったジャーナリストがFacebookで伝えてくれる内容。ガザにいたときに知り合った人が直に伝えてくるメッセージ。

一番気になっていたことは、イスラエルの多くの人たちは二〇一三年七月七日を起点にしてものを考えている。ではそれまでの何十年の間、自分たちは何もしてこなかったとでも？パレスチナ人を蹂躪し続けた人間が、そのことを棚に上げて十月七日に始まったというのは詭弁でしかない。ガザの子供たちと関わるようになったのは、私がそんな風にヨルダンとイラクを行き来している間に、ヨルダンを起点にガザを訪れていた「パレスチナ子供のキャンペーン」の事務局長と出会ったことに端を発する。彼女は、ガザの子供たちに音楽を教える教師を探しているところだった。九四年からガザに希望が見え始める。九八年には自治が始まるのだと。

それに向けて、いろいろなことが一気に動いていた年、私はガザに旅立った。

九四年からのガザ行はヨルダンからの陸路。「スタンプを押さないでくれ」と検問所で伝えた。別紙に押してもらったものをパスポートにはさんで、出国時に返すのである。いい顔はされない。当然だろう。とても失礼なことをしていいるのはわかっている。「あなたの国に来たことを知られ

てはまずいのですよ」と言っているのと同じだから。この先のガザに行くのにエレッツのボーダーを越えることになるが、そこでもチェックを受ける。職業を聞かれそのたびに答えた。“I am Opera singer”。

じゃあ、歌うつみろと言われ、歌うのはトスカ。“Visa d'arte”。

アトファルナセンター。ガザの北部、リマール地区にあるパレスチナ人のための聾学校。そこで五年間、日本とガザを行き来しながら、子供たちに音楽を教えた。正確に言うなら、教え方を毎日見てもらいながら、パレスチナ人の先生たちに音楽を教えていた。リズムは命の鼓動、ビート。僧侶の使う団扇太鼓を使って、自分の胸に置いた手に感じた鼓動を太鼓に移すことで互いの心臓の音を聞きあう。一〇〇人いれば一〇〇の速さが規則的に打ち鳴らされる。人はそれぞれに確かな響きを刻んで生きているのだと。そして、打楽器の固有の音が違えば、そのリズムは和してハーモニーとなる。人は人とながらあい調和して生きている。私は音楽を通じて、人と和する喜びを教えた。あなたたちも、一人ではなく、だれかとつながって社会ができるのだと。憎むより恨むより愛してほしいと。

ガザ地区。今、映像で見るその空間には、たぶん学校があった。シファ病院もやられた。リマールの海岸には、当

花火散る中イスラエル兵撤退す

薔薇^{さうび}棒^{ぼう}ぐ インティファダで倒れし雄に

銃声^{じゆうせい}や たった十二歳^{じふにさい}で君は逝く

血に染まる少女の胸や 芥子^{けし}の花

またひとつ命散りゆく 朱^{あか}きバラ

向日葵^{ひまわり}よ 本当に平和は訪れるのか

私の頭の中にある彼らの笑顔は、三十年前で止まっている。今も、笑顔であってほしい。たとえ現世でかなわなくても、彼らの凍り付いた笑顔は新しい世の中に希望を投げかける。もう一度人として生まれておいで。この世の中に今度は、いや今度こそ、幸せを手に入れることができると思信じて。悲しみを抱えて逝った人たちは、次は喜びの中に生まれてくるはずだから。

94年ガザに過ぐす ー移り行く日々ー

(当時日記代わりに書いていた句集より)

熱く燃ゆ 占領を解かれしガザの夜^よは

パレスチナの旗 子ら振りし石に替え

下田ひろみ

しもだ ひろみ

1959 三重県生まれ

声楽家としてオペラの世界に足を踏み入れていたが、27歳の時甲状腺癌の摘出手術を受け、舞台を降りる。その後、出版社で勤務したが、30歳で卵巣全摘手術。声楽家として立つことを断念するも、声を残してもらえ、命をつないでもらえたことで、自分には、まだこの世で何かしなくてはいけないことがあるのだろうと思う。翌年、湾岸戦争勃発。会社を辞め、いただいた命を使うために日赤救命救急士適任証を受けイラクへ。94年から98年、日本で活動費を稼ぎながら、ガザでパレスチナ人のための聾学校にて音楽を指導。同時に日本でイラクやガザの報告会を兼ねたコンサートを実施。

2000年にコンピュータの勉強を始め2001年より、高校で情報の非常勤講師として教鞭をとる。退職後、中学受験専門の進学塾において国語を指導。

第9回「桐島洋子賞」受賞



受賞の言葉

下田ひろみ

最優秀賞の連絡を受けた時、信じられない思いと、もしかしたら、ガザの状況を少しでもいい方向に変えることができるかもしれないという希望とで、思わず声が詰まってしまう。昨年からのガザとイスラエルの状況がどんどん悪化する中、自分には何の力もないという現実打ちのめされながら日々を送っていたところ、たまたま目にしたこのエッセイ賞。私一人の力では世論を動かすことは無理でも、一人でも多くの人たちがガザという特殊な場所で生きることの難しさに心を寄せてくれたなら、止められるかもしれない。それにかけてみようと思募したので。今回、こうして賞に選ばれたことで、活字となって多くの人の目に触れる機会を得たことに感謝いたします。ありがとうございました。



94年5月もうすぐ平和が訪れるとガザの人たちは希望に溢れていた



94年5月29日 アトファルナセンター音楽室でうちわ太鼓を使っているリズム打ちレッスン。左下のムスタファも頑張って参加

プラハの街角にて

みやまやよ
深山彌生

「NHK『映像の世紀』1968―1989年の二一年間をつないだ勇氣」を観た。そこにプラハの春からベルリンの壁崩壊の映像が映し出された。

十数年前に『プラハの春』『ベルリンの秋』『ウィーンの冬』各上下巻、春江一也著を読んだ。著者は当時チェコスロバキア日本国大使館に勤務中、「プラハの春」民主化運動に遭遇。ワルシャワ条約軍侵攻の第一報を打電した人物。1968年から始まって、1989年のベルリンの壁崩壊に続くヨーロッパの歴史を知らなかった私は、読了後感動した。そして知らなかったことを知りたいと、チェコスロバキア・プラハに行ってみたくなった。この目で歴史を、現地を、プラハ城・カレル橋・日本大使館、カレル大学を見てみたい。その地に立って、その地の空気の中で、風景の中で歴史を感じてみたい気持ちを抑えきれなかった。行ってみてみたい場所をメモし、地図を広げマークし、プラハ

で自由時間の多くあるツアーを探しに探し、2012年に訪れた。

1968年当時、「プラハの春」のチェコスロバキアの国民、「言葉の民」とも言われる民衆は共産主義の抑圧から脱し、経済改革と自由化への機運を高めつつあった。言葉についてこんな記載もある。

「命をかけて真実を語る言葉は無敵であり、永遠の力を持つ心理となる。言葉は魂だ。『それでも地球は回る』と言ったガリレオしかり。異端審問にかけられ幽閉された。教会の天動説に逆らう心理を語ったがゆえの弾圧だった。既成権力は、よって立つ権力基盤を脅かすものを過酷に弾圧し排除しようとする。しかし歴史の流れにおいて永遠なる権力は無い。ガリレオの肉体は滅びたが、その言葉は永遠だ。弾圧した教会の権威はいまや跡形も無い」や、ソ連でイデオロギーが宗教化したのは、「イデオロギーによって権力を手にした者が、宗教はアヘンだと言って教会権力を

駆逐した。しかし人間は心のよりどころなしには生きられない。権力を守るためイデオロギーを類似国家宗教として利用しただけ。宗教化したイデオロギーは、民主主義を知らないロシアの大衆を誑かし、統制するのにもってこいの道具となった」など、春江一也の記述からも想像に難くない。

プラハの多くの民が、言葉――新聞やちらし、ラジオ放送や街角で、ソ連兵へ語りかけ――などで「プラハの春」は静かに始まっていった。やがてあらゆる市民たちが堰を切ったように発言した。プラハの市内・チェコスロバキア各地で、学生や労働者の政治集会が開催され、論争が始まった。

建国の父トマーシ・ガリク・マサリクとその息子ヤン・マサリクをしのぶ行事がカレル大学学生有志によって組織され、やがて旧市街広場、ヤン・フス像前での討論会、プラハ青年集会へと広がる。

八月二〇日午後8時半過ぎ、プラハ・ルジネ空港にソ連軍用機が到着、空港閉鎖・空港ビル全体爆破・占拠・ワルシャワ条約軍という名目のソ連占領軍の大空輸作戦がはじまった。同時にチェコスロバキア国境は、北(DDR)、東(ポーランド・ソ連)南(ハンガリー)の三方面から突破された。二二日・二三日と占拠は続くが、二二日広場に若者たちが集まり始めた。いくつものグループが広場に流れ込み一万五千を超え、群衆の間に不穏な空気が流れ込む。カレ

ル大学の学生ヤンが演説を始めた途端、戦車が群衆を蹴散らす。轟音と地響きをまき散らしながら戦車が動き回る。

悲鳴、絶叫。戦車が歩道に乗り上げ鉄柱をなぎ倒し、高圧電線が垂れ下がりが、戦車後部の燃料タンクに引火、黒煙とともに火炎があがる。装甲車が拳銃を乱射。なぎ倒される人々、逃げる群衆、音を立てる跳弾。旧市街広場のソ連兵たちが取り囲むヤン・フス像の前、ひとりの学生が抗議の焼身自殺、そしてプラハの春は鎮圧された。プラハの春は死んだ。

その後1989年、ベルリンの壁が崩壊されるまで共産主義は続く。

私がおとずれた2012年はすでにチェコ(静かな革命以降)とスロバキア(ビロード革命以降)に分かれ、プラハは平穏な素敵な「百塔の街」だった。カレル橋には多くの観光客があふれにあふれ、思い思いに写真を撮ったり、語り合ったり、ごった返している。ガイドさんに連れられて行ったプラハ城も凄い人混み。城下に広がる「百塔」といわれる赤い屋根屋根が、五月の爽やかな風と陽の光と相まって、輝いていた。憧れというか、もっと切実にその場に立ってみたかった私にとって、穏やかで優雅な街並みは、一服の絵のように美しく、夢を見ているような素敵な時間だった。が、このプラハ城の地下で学生たちや有識者の民が、プラハの春に討論し、激論し、ときには殴り合いにも

なりながら、民主化を夢見、集合離散を繰り返していたのだと、歴史の重みがひたひたと身を包む。文字の世界からの「プラハの春」は想像の域からは出なかったけれど。

この地に立ってみたかった。追体験などというのはおこがましいが、それでも民衆の息吹を感じたかった。だから自由時間には、ガイドブックにはない日本大使館やカレル大学を訪れようと密かに思っていたが、どうしていいかはわからなかった（添乗員に聞いてもわからず）。プラハ城から百塔の街・プラハ市内を我が目を皿のようにして見つめ、アメリカ大使館の国旗を見つけた。あそこ一角に日本大使館もあるに違いないと見当をつけた。だから自由時間になるとすぐに、さっきは途中まで行ったカレル橋を渡りきって大使館のある方向に歩いた。数分後アメリカ大使館は見つかった。カレル橋は肩がぶつかるくらいの人々がいるのに、大使館周辺に人の影はまったくなく、ただひたすら歩き回った。他国の大使館は見つかるのに、日本大使館は見つからず……でもきつとあるはずと少し重くなりかけた足で探す。見つかった。

しかし、チェコ語（読めないけど）と日本語で「休館」と表示されていた。その日は祭日だった。中には入れないのも、話を聞けないのも残念だったけど、たどり着いた満足感で帰りの足取りは少し軽くなった気がする。帰り道カレル橋の中央あたり一人で歩いていた添乗員さんとの出会い、



カレル橋（筆者撮影）

お茶に誘った。そこで彼女から旧市街広場にある一番大きな土産物店には、日本人の店員が数名いると教えられた。

お茶後、軽くなった足取りで旧市街広場に向かう。教えられた土産物店では、日本人の店員さんのお一人がカレル大学を知っていた。地図を書いて下さりながら「今日は多分しまっている」という。そう、祭日だからしょうがないけど、それでも行きたいと地図を片手に出発する。誰にも負けない方向音痴の私だから、たとえ行けても帰りが心配と、曲がり角にある店や物（ポスト・看板など）をメモしながら歩く。歩いて十五分弱と言われていたが、二〇分歩いても時間がなくなると諦め、広場に戻って馬車に乗って連れて行ってもらおうと決め、もと来た道に戻る。なんとか旧市街広場に着き、馬車を探す。

〈カレル大学？〉

〈OK〉という駅者に

〈How much?〉と尋ね、日本円で約一〇〇〇円と聞く。

それならと乗り込んだ後

〈Only one?〉と言われ、とたんに不安になる。その上さっき行った道とは走っているところが違う。何とも言えない不安で手に汗、緊張が走った。が、青年駅者は街角の花屋さんや、店先の人々に明るく挨拶し、手を振りながら、馬を走らせる。

——いい人！と自分に言い聞かせる。そして先ほど二股の道で行かなかったほうの道を行った。あった。カレル大学が。大学正門前で青年駅者は馬車と私の写真を撮ってくれた。

——本当にいい人——だった。さらにカレル大学正門には張り紙があり、読めないながらも、正門が開いていて入れることがわかった。入り口で名前を書き前の人に続く。そこは〈プラハの春〉展示の会場だった。

洞窟のような、長い廊下が続いていた。その壁には展示物。チェコ語（たぶん）だし、わからない展示も多かったけど、旧市街広場で抗議の焼身自殺したヤン（であろう）の半分焼けた学生証、かろうじて顔が写っていた。そしてなによりショックだったのは、カレル橋を市内に向けて行進してくるソ連兵の縦列。四、五列に整列し後ろは見えないほど長く続いている。ドスンドスンと重厚な足音が聞こえてくるような衝撃だった。ワルシャワ軍条約の戦車の先には、獣じみた呻きの笛、異様な物音、叫び声や悲鳴が聞こえる。何枚も何枚もの写真、砕かれたレンガや崩れた壁や証拠物の展示は、〈プラハの春〉をより身近に感じさせてくれていたし、衝撃だった。脅威だった。そして懼れた。

あの時代、中欧ヨーロッパでは多くの民衆が共産主義か

らの脱却を願った。スターリン主義的な共産党の一方独裁を崩壊させていく、〈静かな革命〉や〈ビロード革命〉が成就するまでには二年という長い時間が必要だったのだと、あらためて恐ろしいと思った。時代の流れが二年という年月を必要としたのか？

あの時代、私は何をしていただろう？ そんな思いにとられた。今平穏に、自由に、好きなときに、好きなところに行ける幸せに感謝した。プラハの春に始まる中欧ヨーロッパの歴史をほんの少し体感し、高台のプラハ城から下ろす街並みの美しさに感動した。旧市街広場や天文時計や歴史ある建物——そこに弾痕の跡もあった——にヨーロッパならではの歴史や文化を見た。

ボヘミアングラスの小物を、宝石入れにしようと、自分のお土産にした。期待通りに、いえ、それ以上の充実の時間を体験できた喜びで帰路に着いたことが昨日のようだ。

十二年後の今、あらためて「プラハの春」を含む六冊を読み直している。



受賞の言葉

二〇二〇年コロナ禍の日々の中で、久しく遠ざかっていた「書くこと」をしたいと小説から始め、今回初めてエッセイに挑戦。

愛読書の「プラハの春」に魅了され、プラハを訪れた日々を書き残したいと思いとプラハの街並みへの憧憬を綴りました。

書くことの楽しみは元より、もどかしさや不安や書いた後の不出来に苛まれながら、なお「書く」のはなぜか？ 受賞させていただいたことで、不安が少し減った気がします。ありがとうございました。



深山彌生

みやま やよい
千葉県立東金高校卒業
慶応大学文学部卒業
1983年9月—2023年10月 公文式三原台教室経営
2023年12月—現在 公文式いき坂教室勤務
2010年頃より新聞雑誌等に投稿活動ははじめ、10編ほど掲載される。
2023年6月 エッセイ・小説集「春夏秋冬」
自費出版

新刊

文豪の死には、作品を越えて人生に深く問いかけるものがある。文豪が残した最新の言葉——それは生きることの深さとその意味を投げかけてくる。文豪の赤裸々な魂に触れる貴重な遺言集。

文豪の遺言

木内是壽



坪内逍遙 尾崎紅葉 樋口一葉 森鷗外 田山花袋 泉鏡花
国木田独步 夏目漱石 島崎藤村 芥川龍之介 永井荷風
谷崎潤一郎 志賀直哉 有馬武郎 武者小路実篤 菊池寛
宮沢賢治 川端康成 小林多喜二 大佛次郎 岡本かの子
吉川英治 太宰治 井上靖 三島由紀夫 松本清張 遠藤周作
吉行信之 司馬遼太郎 寺山修司 向田邦子 中上健次 他

アジア文化社

1728円(税込) 送料サービス

2017.9.1 出版

印刷された本文を正確に複製して下さい

作家の遺言は、死に臨んで純粋に自己と向き合い、飾り気のない一人の人間として自己の意志を発露している。それは作家自身の素顔に迫るもので、死にざまは生きざまに通じる。

ひと夏とイルカと

高たかよ



もう二十年の歳月が経とうとしているのに、あれは一体、何だったのだろうか、と未だに繰り返し思い出す。私をずっと見つめてキューキューと声を出し、その場から動かないイルカたち。

昨今四十代に突入したが、二十年前は留学生という身分で、外国に住み現地の大学に通っていた。海外留学とはなんと贅沢な、と今でこそ思うが、その頃は不自由な言葉と文化の違いに翻弄される暮らしが苦痛で、夏休みに入るとすぐ日本に戻り、秋に新学期が始まるまでの数ヵ月間を実家で過ごした。毎食ご飯を作ってもらえる安心した生活に甘え、繁華街のカフェで友人とお喋りを楽しみ、短期のアルバイトをする暮らし。働くのは好きではないが、日本の生活を満喫するためのアルバイトだった。

その年の夏もいつものように帰国し、祖父母の家を訪れたり、友人と久々に再会したり一通りの用を済ませると、電気メーカルの工場でアルバイトを始めた。今後使う予定

のない、電化製品の部品や付属品を処分する業務。

毎朝出勤すると、処分する部品が記された伝票の束を渡される。部品番号の横に「30」「5」と書かれていたら、現在30個ある部品を25個処分し、在庫を5個にせよということ。5個使い終わった時に、残りの25個を処分すればよいのではないだろうか。これは本当に今しなくてはいいことなのか、と疑問を抱きながら作業をした。時折、30個ある部品を0個にせよというケースもあった。この場合は、一種類の部品につき一つのコンテナに収納されているので、コンテナ一つが空になることで新たな部品を入れるスペースができるから理解できる。だが、0にすることは稀だった。一度、指示より多くの部品が捨てられてしまったため、製造に支障が出たこともあった。これは大問題なんだ、と言う社員の話を、だから前倒しで捨てなければいいだけではないのか、と同情することなく聞いていた。

夥しい種類の部品や付属品は、ミニチュア版の立体駐車

場のようなシステムで格納されており、部品番号を打ち込むと機械がぐるぐる回って部品が出て来る。ここまでは工場内で行なうが、それを数え、そして処分のため材質ごとに分別するのは屋外での作業だった。9時から17時まで、滴り続ける尋常ではない量の汗。汗による炎症だろうか。眼鏡の鼻当てで塞がれている部分の毛穴が、紫色に変色した。

一方で良いこともあった。真夏の屋外作業への配慮で、一時間毎に一〇分の、給料から引かれることのない休憩があった。また、処分するものは、欲しければ自由に持ち帰ることが許可されており、毎日、何かしら貰って来た。乾電池、よくわからないネジ、よくわからない小さなバネ、キーボードのボタンに大量のミシン糸。役立つ日は永遠に来ないであろう、アラビア語らしき文字で書かれた冷蔵庫の取扱説明書を面白がって貰って来たこともあった。

夏休み中そのアルバイトをする予定だったのだが、処分するものがなくなったので勤務は終了と突然通達され、持ち帰り自由であるが故に非常に気に入っていたが、ほんの二週間で幕を閉じてしまった。

求人情報誌を買って来て、予定していなかったその夏ふたつ目のアルバイトを探すと、隈なく見るまでもなく、応募するものはすぐに見付かった。一際目立つ、地元の大きな水族館の名前。繁忙期のための大量募集だった。イルカ

だけでなく、シャチのショーまである大規模の水族館だが、飼育動物と関わることもないいくつかの接客系の職種での募集で、私はミュージアムショップの販売員として採用された。

持ち帰りではないがこちらにも特典が有り、勤務の前後に自由に館内を見学することができた。早めに出勤すれば、勤務前にイルカショーを見ることができたし、生まれて間もないベルガの赤ちゃんの展示が始まった頃でもあったので、人間とは全く異なるスピードの成長を、暫くの間、見守ることもできた。

何の専門知識も要らないアルバイトであったが、これだけは絶対に覚えるように、と最初に言われたことがあった。当時、飼育されていた四種類のペンギン、ヘビゲペンギン、アデリーペンギン、ジェンツーペンギン、エンペラーペンギンの大人と子どもを識別できるようにすること。と言うのも、店内ではペンギンの置物が売られており、大人一羽と子ども一羽のペアで購入する人が多いのだが、意図せず種類をまたいだペアで買ってしまう人もよくいたので、その際に「こちらは、コウテイペンギンの大人とヒゲペンギンの子どもの組み合わせになりますますがよろしいでしょうか」とミスペアでの購入を防ぐためだった。大人ペンギンは特徴があるので問題ないのだが、大人ペンギンの持つ特徴を持っていないばかりか、どの種類もあまりに似ている

子どもペンギンを私は最後まで覚えることができなかった。小学校低学年の頃に考えていた将来の夢のひとつに、水族館で働くお姉さんがあったくらい、私は水族館が好きなお姉さんだった。当時は、後に働くことになるこの大きな水族館はまだ誕生しておらず、郊外にあるふたつのこじんまりとした水族館に祖父が頻繁に連れて行ってくれた。一方の水族館ではタツノオトシゴ、もう一方ではタカアシガニがお気に入りだった。「水族館で働くお姉さん」というのは館内ショップの販売員のことではなく、ショーとまではいかなくとも、マイクを持ち水槽の前に立って解説する人のことだった。たった四種類のペンギンの子どもすら覚えられない私にそのお姉さんが務まる筈がないが、水族館で働くという形だけに於いては、一応、夢を叶えられたのではないかと、とお客さんが通ることのない、湿気と生臭さが満ちるバックヤードを歩きながら思った。

夏休み期間中なので水槽前は連日、家族連れを始め大勢の客でごった返した。館内の薄暗い照明がもたらす雰囲気とは正反対に、繁華街かと思うほどの賑わい。中でも人気なのは、イルカの泳ぐ室内の大水槽前だった。もちろん屋外でのショーも人気だ。だが、ジャンプをしたり、芸をして飼育員から餌をもらう水上での光景が真っ先に浮かぶイルカが、水中で泳ぎまわる姿は誰をも惹き付ける。

泳ぎまわるという言葉通り、イルカたちはいつも大きく

円を描いて泳いでいた。止まることなく、大きな水槽の中をガラスや壁に沿ってまわっていく。正面のガラス近くを泳ぐ時は、イルカってこんなに大きかったんだ、と体感しながら見られるが、奥の壁に伝って泳いでいる間は物足りないもので、誰もがまたこちらに来るのを待ちながら観ていたし、それが常だと思っていた。

大きな水族館なので、ミュージアムショップから着替えのためのロッカー室まではかなりの距離があり、その殆どはお客さんの入れない裏導線を行くのだが、建物の構造上どうしてもないのか、一旦、展示スペースに出て、水槽前を横切らなければいけないルートになっていた。そこがイルカの泳ぐ大水槽前で、早番で帰る時は、何百人ものお客さんの間を縫って歩かなければならなかった。

しかし、ある日の夜。初めて閉館後までの遅番勤務を終えた後のこと。お客さんが一人もいないイルカの水槽前の静まり返った大きな空間を、遅番を終えた四、五人だけで歩いていると、水槽の様子がいとも違うことに気が付いた。

数頭のイルカたちが、こちらを見て横一列になって立っていた。人間と同じように直立した姿勢で頭を上、尾びれを下にし、お腹をこちらに向けた姿勢で、その場から動かない立ち泳ぎと言えばよい。これ以上はガラスに近付けないということまで寄り、これ以上、人間と目線の高さ

を同じにすることはできないという位置にいる。私はそんな信じられない光景に気付くやや、遅番組の輪から離れてイルカたちの目の前まで寄って行つた。すると今度は、イルカたちがキューキュー、と途切れることなく声を出していることに気付いた。一枚のガラスを隔てて、自分とイルカだけが対峙するという初めての経験。私が立ち去るまでイルカたちはその場から動くことなく、ずっとこちらを見つめて声を出し続けていた。

私は、日常の中に突如として訪れた現実とは思えないその体験に甚く興奮し、日中とは全く異なるイルカの姿について他のスタッフたちと分かち合いたいと思うも、以前から働いている人も、私と同時に大量募集で採用されて働き始めたばかりの人の中にも、関心を示している者はいなかった。長年働いているというリーダーには、「いつもそうだよ」と言われただけだった。

閉館後は決まってイルカたちが寄って来てこの光景が見られたので、遅番が好きになった。

イルカと自分だけが向き合うひと時をできるだけ長くしたくて、裏導線から水槽前に出る際には遅番組の中から一番に飛び出して行き、皆が再び裏導線へと消えて行くギリギリの時までイルカの前にい続けることを繰り返したのだが、暫くすると考えさせられるようになった。閉館中と閉館後の、この差は何なのだろう。大勢の客の前では素っ気

なく泳ぎ続けるだけなのに。ツンデレという一言で片付けていけないことだけはわかる。手やハンカチを振ると好奇心から近寄って来る習性はあるみたいなのだが、遅番販売員たちはイルカに向かって何のアクションもしない。こちらに寄ってきて、こちらを見つめ続けて何を訴えているのか。キューキューという声で何を求めているのか。水族館というガラスと壁に囲まれた水槽で飼われ、かつ、その生きている姿自体を見せものとされている動物。捕らえられて水族館に来たイルカは可哀想ではないのか。野性とした野性を知らないイルカは可哀想ではないのか。野性と人工飼育下、もとい野生動物と展示動物。水族館は研究機関でもあるのだが、そのために生体を所有し続けている事実と、実物を見た後にミュージアムショップでそれを模したぬいぐるみや置き物を購入して持ち帰ることに、人間の欲望を見た気がした。

日本の子ども達の夏休みが終わると同時に、私の水族館でのアルバイトも終了した。蚊取り線香の香りさえ惜しみながら暫く過すと、私の夏休みの終わりも見えてきてしまつて、毎食ご飯を作ってもらえる安心した生活に別れを告げ、不自由な言葉と文化の違いに翻弄される暮らしに戻って行つた。従業員出入口の傘立てに、お気に入りの傘を忘れて来てしまったのだが、最後の出勤日以来、あの水族館へは一度も足を運んでいない。



高たかよ

たか たかよ

1982 愛知県名古屋市長生まれ
英国ノッティンガムトレント大学美術
学部卒業
会社員
日々、インターネット上のnoteにエッ
セイを執筆中

受賞の言葉

高たかよ

この度は優秀賞を頂き、誠に有難うございます。
自分で認めた文章を応募するという冒険を初めてし、そ
れに賞を与えて頂き大変光栄です。
募集要項の最後にありました主催者の方からの言葉
——「日々の中に埋もれている強い思いや記憶」「残し
ておきたい体験」「体験に基づいた現代への鮮烈な視点」
——に強く惹かれ、これまでの人生の中で一番、これらの
言葉を表す体験について書きました。

Essay

第19回
文芸思潮
エッセイ賞
優秀賞

母の満州

満州国北安省北安県北安市北安街無番地北安省立医院に
て出生、父中田重郎届け出で、在満州国特命全権大使梅津
美治郎受付。

これが、私の戸籍原文である。
満州国も、満州国特命全権大使兼関東軍司令官、陸軍大
将梅津美治郎ももう赤い夕陽とともに歴史のかたに沈ん
でいった。

私はやたらと、北安^{ペイアン}という文字の羅列する自分の戸籍原
文を見ると、何か得体の知れぬものが込み上げてくるの
を覚えた。二歳で日本に引き揚げたので、もちろん北安の
記憶は全くない。母に聞く限りである。

戦後、貧しい母子家庭の暮らしの中で、母は北安のこと
をよく話した。楽しい思い出はないと言いながら、北安の
話にはかすかな夢があった。

一步町の外に出ると見はるかす大草原が広がっているこ
と。北安の冬は零下四十度にもなり、寒くて長くて辛いこ
と。しかし、春が来ると一日で大草原に名も知らぬ花が一

中田重顕

斉に開くこと。父の部下だった「満人」が小家族で食べ
れないのに、大きなマクワウリを何個も家の中に転がし
てくれたこと。

母の話は雄大だが、いつもどこか悲しみがこもっていた。
「満人」の部下たちが支配者日本人へのへつらいにマクワ
ウリを何個も転がしてくれたことにも気づいていないよう
だった。

奥熊野の四囲を山に囲まれた狭い村から、その見渡す限
り草原だという北満州で父と母はどんな思いで暮らし、ど
んな思いで、異国の病院で私を産んだのだろう。

戦後の父と母の生活が惨憺たるものだっただけに、その
思いは深い。

父は農家の次男で継ぐような山も田もなく、兵役で駐屯
していた満州で一旗上げるつもりで渡満したようだ。しか
し、日本の植民地満州といえども何の学歴も資格もコネも
持たない青年にうまい話はなく、結局満州鉄道鉄路警護隊
という体を張る仕事しかなかった。北に行く方が手当も良



本体価格 500 円＋税
御注文はアジア文化社まで



アジア文化社
本体価格 1,400 円＋税

かったのだろう。北満州北安警護隊に所属し、北安から列車で一時間くらいの李家という村に官舎をもらい、新婚の母を連れていった。官舎といっても泥と土の家で電気も来ていなかったという。

父は満州で一人暮らししている間に肺結核を病んでいた。母の母である祖母は、父が医者 of 全快証明書を持ってきたと言うが、結局父は母と結婚後に肺結核が再発して満州から引き揚げ、戦後まもなく死ぬのだ。母は「あれは親が悪いのよ。肺病がそんなに簡単に治るはずもないのに嫁がしたんだから」と両親を恨んでいた。母はその頃の娘がほとんどそうだったように、親のいいつけどおり結婚したのだった。

しかし母は、口で言うほどその結婚を失敗だったと思っていたふうはない。母は明らかに父を愛していた。それは父が死んでからの苦しい生活のなかでも、私たち子供にはわかった。母が語る父の思い出にはひそやかな愛情がこもっていた。

母にとって、満州の電気もない、泥と土の家で暮らした三年ほどの生活がもつとも平穏な満ち足りたものだったのかもしれない。零下四十度にもなる北満の原野の村で母と父は小さな幸せをつかんでいたのであろう。

母は九十六歳まで長生きしたが、九十三歳のとき、地元老人会の機関誌に次のような文章を書いている。

私は母からこの流浪の書家のことも、蓮生貴子という言葉も一度も聞いたことがなかった。大人にもなれなかった息子が哀れで言えなかったのかも知れない。

人家のない原野に立つ白亜のきれいな北安省立病院……。私は後に、生まれ故郷北安に旅してこの病院を見ることがになる。

北安は北満州の中心地哈爾濱から列車で十時間も北に向かったロシアとの国境も近い地にあった。汽車の窓から果てもなく広がる大草原に放し飼いの馬が点々と駆けていくのが見えた。

北安の駅は、広い大地に曲げる必要もないのだろう、真っ直ぐな線路に沿って駅舎があった。中国国際旅行社の周啓景さんという老人のガイドと一緒にだった。

その時、妙齢の女性が声をかけて私の荷物を持ってくれる。

「北安市外事公司の程さんです」

周さんが紹介してくれる。北安には旅行社がないので市の役人である彼女が世話をしてくれるのだ。彼女はこんな北の町にも、と思わすほどきちんとメーキャップしていて眉も細く描いた美しい人だった。笑うと愛らしさが際立った。しかし、彼女が笑ったのはそれきりだった。その素敵な笑顔を二度と見せることはなく、彼女は不機嫌と憤怒に満ち満ちているふうに見えた。駅の構内を写真に撮ってい

昭和十七年、私は満州の北安にいました。ひたすら望郷の念に駆られながら異国の生活に少しずつ馴染もうとしていました。

その年の六月、長男が生まれました。あたりに人家のない原野に立つ白亜のきれいな北安省立病院でした。満州の夏は夜が短い。東の空が白みかかるころ家で待機している主人に生まれた知らせが入ると、ほとんど同時に見も知らぬ流浪の書家が訪れ、主人は「今男の子が生まれた」と話しました。すると、すかさず持物から紙と筆を取り出し「蓮生貴子」とそれこそ墨痕鮮やかに大書してくれたそうです。この子は成人したら大人になるという意味だそうです。書など何もわからない私にも滴るばかりの墨の勢に息をのむ思いでした。気をよくした主人はその流浪の書家と一献飲み交わし幾許かを渡して帰したそうです。まだ明けきらぬ荒蕪たる原野に飄々とさっていったそうです。息子は大人になるということはあたらなかったが、父の倍以上の年月を生きて、孫も抱き人並みに生活しています。何事も忘却の彼方に押し流される今日この頃ですが、この事は鮮やかに思い浮かびます。それを聞いた時の満州の六月の朝のことも、李家の家のことも、白夜のことも。辛酸の道が待っていることなど知る由もなく平和な一時期でした。

いかと問うと、厳しい目をして首を横に振り、ホテルに着くと支配人も従業員も叱りつけた。

彼女は日本語は一言も話せない。

昼食をすませたら、私が父母と育った李家まで車で案内するという。しかし、往復五時間かかるし洪水で道が悪く、途中行けないかも知れない、ともいう。程さんは厚いハーフトの衿を立てて現れる。帰りは夜遅くなるし、八月の半ばとは言え北満の夜は冷えるのだという。用意してくれたマイクロバスは北安の町を出るとたちまち、大草原の中に入ってしまった。見渡すかぎりの青い地平線に、ポプラ並木の真っすぐな道が地の果てまで続く。道路はでこぼこですごい揺れようだが、放牧の馬が走り、牛がゆつくりと歩く草原は限りなく美しい。前後左右どこを向いても地平線である。

私は言葉も発することのできない感動に包まれていた。

この草原なのだ。父や母は故郷興熊野の山に囲まれた小さな村からこの見はるかす大草原の中に身を置いたとき、あの人たちに何が起こったかがえるような気がした。

草原の中で、五、六歳の男の子が一人遠い地平線を見ている。見渡すかぎり人家はなく彼以外の人の姿もない。この少年はどこから来てどこへ行くのであろう。

道路はぬかるみだし、とうとう動けなくなる。運転手は苛立つて猛烈にアクセルを吹かすが動かない。周さんから、

中田重顕

なかた しげあき

1942 中国東北（旧満州）に生まれる
 1993 12月号「文学界」に同人誌優秀賞として「雪降る代々木正春寺」転載
 1996 「季刊文科」創刊号に「東京オリンピックのあった頃」転載
 1996 吉村昭と朱の丸御用船の世界「志摩の波切で作家は」が四日市ふるさと文学賞優秀賞
 2000 6月号「文学界」に同人誌優秀賞として「黎明が丘暮れる」転載
 2004 第10回鳥羽マリーン文学賞大賞受賞
 2024 中部ペンクラブ文学賞受賞「悪名の女」
 「たそがれ、サムトの婆と」「観音浄土の海」「みくまの便り」「私の好きな女性」「熊野びとの戦記」「霧吹観音堂」出版



いつの間にか程さんが傍に立っていた。程さんの髪がさわさわと吹いてくる北満の風に揺れていた。その顔に会ってから二度目の沁みるような笑顔が浮かんでいた。私は涙を流している自分に気づいた。

程さんに、もう引き返すよう言ってください、と頼む。程さんは黙って頷き、運転手に激しい口調で命令した。車は何とかユーターンに成功した。

「その代わり美しい風景を見たいから停めていただけませんか」というと、程さんが後を向いて、「どこでも何度でも停めますからいつでもください」という。笑顔はないが、眉間の皺は消えている。案外いい人なのかも知れない。

東北の八月中旬はまだ雨期だという。あの大陸特有の青空は見えないものの遠い地平線が夕映えて、ポプラ並木越えに茜色に輝いて息を飲むほど美しい。私は車を停めてもらって何度も悠久の風景に見入った。

夕食はホテルの食堂でとる。料理はじゃがいもや豆腐や茄子やインゲン豆が豊富に使われた実に懐かしい味の美味しいものが並ぶ。母が子供の頃作ってくれた料理に似ている。母はきつとここで教えてもらったものを作ったのだらう。

北安の夜はしんと更けた。その夜、私は熊野の初冬を思わず冷気に包まれて静寂の北満の生まれ故郷でよく眠った。

翌朝、程さんは朝食後北安省立病院につれて行ってくれた。北安の町は狭く、すぐに着いた。平屋建ての間口の広いくすんだ石作りの建物で今も病院として使われている。

私は意外な思いにかられた。日本人の建てた省立病院だとすれば例の植民地独特の威圧的な建造物だろうと思っていたが、その病院は庶民的で中国風にも見える。

母が九十三歳の時書いた手記には、この病院のことを「人家のない原野に立つ白亜のきれいな北安省立病院でした」と表現しているが、とても白亜の建物とは見えない。母は記憶を美化していたのだろうか。それとも何かの思いがあったのだろうか。

そういえば、母は中国人のお医者さんも患者もいたと話していた。すると父は、もう一つ後で見た三階建てのいかにも植民地風の満鉄病院ではなくこのやや寂れた省立病院をなぜ選んだのだろうか。見知らぬ地で初めての子を産む妻に少しでも設備のいい病院を選ぶのが夫というものではないか。それ位の経済力さえなかったとは思えない。

私は、自分が生まれたその平屋建ての汚れた壁の病院を複雑な思いで見ている。父が敢えて、中国の人々と同じ病院を選んだのだ、と思いたい気がした。入口の案内を見たが産婦人科は今はない。

北安市北安街無番地……、戸籍の原文にあるようにここはあの頃、番地もない草原の中だったという。今は町の中である。寒さを防ぐためか、極端に小さい古びた窓の五号室で、二十歳の母は、六月の白夜に私を産んだのだ。五号室がどこか遂に分からなかったが。

受賞の言葉

中田重顕

今年は母の七回忌に当たる。母を冠した題名のエッセイが受賞したのは、あの世とやらにいるであろう母の力添えかも知れない。

文学の師匠である故清水信先生は、僕の著書の帯に「居住地・熊野へのあくなき執着、さらに生誕地旧満州への慕情が、魂のグローバルな彷徨を支えている」と書いてくれた。文学仲間からは、また満州ものかと揶揄されるのだが、やはり満州ものを今後も書き続けられると思う。



南北之塔

青地久恵

六月二十三日は沖縄県の戦没者を追悼する〈慰霊の日〉である。

太平洋戦争で二十万人以上もの命が奪われたという沖縄を、私が初めて訪れたのは釧路^{くしろ}地方の草木が芽吹き始めた平成七（一九九五）年五月であった。平和祈念公園は鮮やかな緑の芝生が広がり、淡紅色の夾竹桃やハイビスカスが初夏の陽光を浴びて咲き乱れていた。広場には〈平和の礎〉があり、高さ一、五メートルほどの刻銘碑が放射状に並んでいて、その数、一一八基。沖縄戦の戦没者すべての名前が都道府県別に刻み込まれているという。平和への願いが決して踏みにじられることのないようにと折った。

探し当てた北海道の慰霊碑は六四〇平方メートルの広い敷地に、何十畳もあるような随分と大きい横長の形にコンクリートで作られていた。その上の真ん中に北・霊・碑と一文字ずつ記された三個のドッチボールのような球体が、高く積み重ねられている。碑の台座にわが家の庭から手折ってきた芽吹いたばかりの雪柳を供え、合掌してその場を後にした。

帰釧路後、友人の鈴木紀美代さんと沖縄の慰霊碑の話題になったとき、「今度、沖縄本島に行くことがあったら、南北之塔に参ってほしい。そこには北海道のアイヌ兵士の遺骨も一緒に納められているから」と頼まれた。そこは摩文仁ヶ丘から離れた山中の高台にあり、アイヌの同胞と〈供養の舞い〉を踊ったが泣けて泣けて、と語っていた。

早速『沖縄戦のはなし』（安仁屋正昭著）を読み、弟子^{てし}豊治^{とよじ}という北海道弟子屈^{てしかが}出身のアイヌ兵士の存在を知った。著書によると、

——糸満市の真栄平^{まえばら}集落の近くには北海道から来た第二十四師団が陣地を構えていて、弟子さんもその師団に所属していた。弟子さんは真栄平集落の人たちと親しく付き合い「北海道のお兄さん」と慕われていたという。戦後の一九六五年、弟子さんはアイヌの同胞と真栄平集落を訪ねている。裏山の奥深い洞窟は戦没者の白骨で溢れていた。

沖縄最後の激戦地となった真栄平は死亡者も多く、生き残った人たちは納骨堂を建てるために政府に願い出ても相

紀美代さんから話を聞き、この『沖縄戦のはなし』を読むまでは沖縄の山の中に〈南北之塔〉のあることも、真栄平集落で供養祭を行っていたことも知らなかった。

沖縄へは観光旅行であっても、悲惨な戦地であったことを忘れないように、との思いで出向いていたが、今度は慰霊の旅に出かけよう。弟子豊治さんはもう亡くなられていたが弟子屈^{くしろ}屈斜路^{くさろ}コタンのアイヌ民族資料館に勤めている友人、戸塚美波子さんが『南北之塔』の世話人、仲吉喜行さんの住所を調べてくれた。

沖縄行きが決まり、休日には少しずつ持参するものを用意した。弟子さんの故郷、屈斜路湖の近くに台風で倒れた一本のトドマツを見つけた。その小枝を二、三本手折った。傍らに立つ白樺の薄い肌色の表皮が少しめくられて、風に煽られピラピラと鳴っている。その先をつまみ、そうつと横に引くときれいに剥がれた。トドマツの小枝、白樺の表皮を小さい段ボールの箱に入れた。

美波子さんに霊前に供えるものはお酒、米、塩、タバコで、果物などは「みんなで分け合しましょう」と食べやすく切り分け、生者も一口食べてから、とアイヌ民族の風習を教えてもらった。

お酒はタンチョウの舞っているラベルの貼られた釧路産の〈福司〉、塩は沖縄県糸満市のもを偶然店頭で見つけた。北と南の供え物が揃った。他にシシャモ、鮭のトバ、紀美

南北之塔

手にされず、集落の人たちが周辺に散らばっていた白骨を洞窟に運び供養していたという話を聞く。その後、弟子さんたちは真栄平の人たちと協力し合い、お金を出し合って納骨堂と碑を建立し、この地で亡くなった沖縄の人もアイヌの兵士も一緒に眠るこの碑を〈南北之塔〉と名付けたという。一九八一年十一月二十四日、真栄平集落裏山で、アイヌの遺族と集落の人たちが、それぞれの地の供え物を持ち寄り、初めてのイチヤルパ（供養祭）が行われた。その日、この地を訪れた八十二歳になるアイヌの浦川タレさんは「息子がどこで死んだのか、その場所も知らなかった。こうしてやっと息子のところへ来れたんだ……」そのあとは涙で言葉にもならなかった――



代さん制作のムックリ（アイヌ民族の口琴楽器）、これらをすべてリュックサックに詰めた。

出立の前日、美波子さんよりアイヌ文様の刺繍された鉄紺色の手作り小袋が届いた。真ん中には臍（へそ）のように一センチほどの草の根が縫いつけられている。添え書きに「これはペヌップというものでアイヌのお守りです。旅の道連れに」と認められていた。

平成十二（二〇〇〇）年九月、那覇空港で宮良さん、嘉手苅さんが待つてくれた。七年前に北海道旅行中の彼女たちと出会ってから四年ぶりの再会である。保健婦という仕事で忙しいのに真栄平集落まで下見に行ってくれたそう、何の不安もなく宮良さん運転の車に乗せてもらった。車中、宮良さんが、

「ここは糸満街道よ。五十五年前には追い詰められた避難民や負傷兵が逃げまどつていたの」

震える声を絞り出すように言った。沖縄は地上戦でどんなに悲惨な状況だったか、特に糸満地区は最後の激戦地だったことを、『沖縄戦のはなし』を読み、理解していたつもりだったが、宮良さんの言葉に身の引き締まる思いがして、何も言えず俯いてしまった。

五十分ほどで真栄平の集落に到着。初めてお会いした仲吉喜行さんは六十代後半くらいだろうか、物腰のやわらかな方で黒縁の眼鏡をかけておられた。初対面の挨拶もそこ

で、無惨にも朽ち果ててしまった兵士たち。「北海道から来ました」とただただ手を合わせた。

四人だけの供養祭だったけれど、仲吉さんは釧路産の酒を飲み、私たちは供え物を分け合っていた。いた。

この真栄平でまだ子どもだった仲吉さんは、弟子さんにかわいがられ、肩車をして遊んでもらったそう。

「日本兵は恐ろしかった。食糧を奪い、逆らえば日本刀で脅す。守ってくれると思っていた兵隊に殺される人もいた。住民が一番欲しかったもの、それは手榴弾だった」

「アキサミヨ（なんとまあ）」宮良さんと嘉手苅さんは顔をしかめて空を仰いだ。

「毎年六月二十三日、集落の人たちで慰霊祭を行います」



そこに白い乗用車で先導してくださる。車一台通れるほどの曲がりくねった土埃の立つ坂道に沿って、小さな白い花びらを反り返らせたサシグサが陽を浴びていた。

六、七分で視界が開けた。樹木に囲まれた高台の平地に高さ二メートル、横幅六メートル、厚さ四メートルほどのコンクリートで作られた灰色の大きな納骨堂が建っている。風雨に晒され、黒や鼠色に変色してくすんだところもあり、ひび割れもできていた。

堂の上には黒文字で「南北之塔」と刻まれた長方形の石碑が置かれ、右側にキムンウタリ（山の仲間）とアイヌ語で、左側には真栄平区民と記されている。日本の戦争犠牲者となった北と南の人たちが、一つ屋根の下で眠っているのだ。この納骨堂の前の台座に、両掌を広げたほどの小さな黒い楕円形の石がそと置かれているのに気づいた。

ふる里の浜迎ゆ 拾い来し石 ひとつ

君眠る島に 置きて 帰らん

亡き人に捧げる白文字で刻まれた言葉のひとつひとつ。

どなたが置いて行かれたのか。慟哭の石をじっと見つめた。台座に私は供え物を並べ、少し離れた空き地に、持参したトドマツの小枝や樹皮を積み上げ、白樺の薄い表皮に火をつけた。弟子さんのふる里で、たくましく育ったトドマツが小さな焚火となつて、南島の空に燃え上がった。

北の地でいそしんでいたであろうに、帰る道も閉ざされ

と仲吉さんが教えてくれる。

アイヌの人たちも昭和五十六（一九八二）年から五年に一度この地を訪れ、イチャルパ（供養祭）を行っていると。今年にはちょうど五年目になるが、戦没者の両親はすでに亡くなられ、兄妹も年老いた。遥かに遠い沖縄で、民族の踊りやムックリを奏でて供養するイチャルパはいつまで続けられるのだろうか。

焚火は消えてしまったのに、煙だけが陽射しに溶け込んでたなびいている。

この高台に植えられている樹木は、クファデーサーといって、人の涙で育つ木と教えられた。この地で四五〇〇人もの人たちが亡くなり、どれほどの涙が染み込んでいることか。クファデーサーは緑濃い大きな葉っぱを広げて、涼やかな木陰をつくっていた。

この地を再び訪れたのは二年後の平成十四（二〇〇二）年四月である。八重山諸島へ向かう途次で一人、タクシーで向かった。高台は二年前とほとんど変わらず静かな佇まいだった。あの日からもう、二十年以上も経ってしまった。沖縄の慰霊の日の前日には、真栄平集落の人たちで高台の清掃をしていると聞いた。今年も集落の人たちに感謝の気持ちで慰霊の日を迎えたい。

三田誠広

善
Zennan
鸞鳥

作品社

受賞の言葉

青地久恵

この度、エッセイ賞に応募した作品が優秀賞との連絡が届きました。誠にありがとうございます。

三年前、七十代最後の冒険で応募したところ佳作でした。作品コメントも希望しましたので、送られてくる評には大層励まされました。

人生の残り時間も少なくなりましたが、更なる深みを求めて書き続けていきたいと思っています。

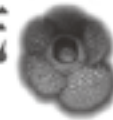


青地久恵

あおち ひさえ

1942 北海道弟子屈町川湯生まれ
北海道学芸大学釧路校修了後、小学校・福祉施設・精神病院勤務後退職
2006 自著『大工の神様』で釧路文学賞
08 大阪文学学校通信教育部修了
21 文芸思潮エッセイ賞佳作
22・23 エッセイ賞奨励賞
釧路文学団体協議会会員
同人誌『さんが』所属

竹中忍小説集

金鯢
IV
落焼

市井に生き
善を貫こうと
闘った無名の人々
その生の真実を
きざむ小説集

地獄と極楽の境界を彷徨する
もどかしさの連続する小説集

著者 竹中忍
発行 作品社

水辺の街で



本間淑子

みそまんじゅう

瀧沢 鈴

私の住んでいたお台場は函館の西部、弁天町にあり、江戸末期に外国船の襲来を防ぐため海を埋め立てて作られたものだが、明治二十九年に解体された。

その後昭和三年、その場所に私の家（二階が事務所、下が住宅）が建てられた。だから私の家は海の上に建てられたことになる。

二階のガラス窓越しに見える春のお台場の海は大自然の粹を感じる。

昆布のゆらめく海面には一番の鴛鴦が遊び、その横の岩陰から二羽の海鷗がぼっかりと顔を出す。船外機をつけた小さな船は水尾を引き、淡い日ざしを受けた海は静かにゆれる。

時折りしとしと降る雨は遠くの山並みを美しく見せ、夕方のお台場に一抹の寂しさを添える。

四月も半ばを過ぎたある雨の日の夕方、一人の学生が二階階段の踊り場下の雨の当たらない所に立っていた。

と言って二階の入口を開けた。

私の家の二階は船から梯子を渡って直接事務所に入れるようになっていたが、この事務所には机も椅子も何もなく、部屋の三方は全面大きなガラス窓で、港の内外がよく見える。

父が港湾の仕事をしている役所に勤めていたので、階下には波状調査の大きな機械があった。常駐しているのは我が家だけ。時折り役所の人は来るが、来るのは年に二、三度だけで実はのんびりとした事務所である。

母に声をかけられた学生は、はにかみながら頭を下げ「ありがとうございます。でも僕は此処が大好きなんです。いつもすみません」

と言った。

細面の色白い学生。礼儀正しい学生。

「とても物静かで今時珍しい学生さんだよ」

母はいつもほめていた。

季節の風は遠く秋を連れてくる。

波は茄子紺に緑が強く加わり、空には鰯雲が泳ぐ。対岸の山々は、紅に色づき始めようとしている。

その頃から踊り場下の学生は、ぱったりと姿を見せなくなった。

年が明け、ふたたび春は訪れたが踊り場の下にはやはり学生の姿はなかった。しかし海には相変らず鴛鴦の番が優

素足で立っている側に、朴蘭の足駄がきちんと揃えて置かれ、その上にふくらんだ小さな紙袋が置いてあった。また蝙蝠傘も横にある。

何を見ているのだろう。

何を考えているのだろう。

時々両手をお腹に当てて大きく深呼吸をしているのだが、吐く息の時であろ、アーと大きな声を出していた。

しばらくしていつも黒い学生服をきちんと着ているその人は、下駄の上から紙袋を取り、中からまんじゅうを出してうまさうに食べ始めた。あれ、あの人あんな所でまんじゅうを食べている。

私は変な人だなあと思いついて見えていた。

春も過ぎそろそろ初夏の風が吹き始める或る雨の日の夕方、相変らず踊り場の下にいる学生に母は声をかけた。

「学生さん、今日は濡れるからこっちへ来て中へお入りなさい」

雅にその姿を見せ、海鷗達は波間に遊んでいた。

夏も過ぎ、秋雨のしよぼ降る夕方の事である。五、六十代と思われる二人の見知らぬ来客があった。二人は夫婦で、雨の日に二階階段の踊り場下に来ていたあの学生の両親だと言った。

母は驚いた。なんであの子の両親が。私、あの子に何かしたろうか。いや何もしていない。咄嗟にこんな言葉が頭の中をよぎったそうだ。

二人は茶の間に上がり、にこにこ顔で静かに話をしている。母はちよつと不安そうな顔をしてお茶を入れていた。

しばらく経ってから父親がゆっくり話をし出した。

「私は大黒町に住んでいる北山富次と言う医者です、内科医なんです。これは家内の八重と言います。子供は二人おりますが、姉の方は中学校の教員をしております。そして弟の勝、勝はお宅にお世話になった子なんです。あれは子供が大好きで医者にならないで教員になりたい、と言って師範学校に入りました。この三月に卒業して教員になるつもりでおりますが、去年の秋に吐血しまして。肺結核でした。本人は春先頃から解っていたようでしたが、私達家族は誰も気がつきませんでした。私なんかは医者なのに……。本当にうかつでした。」

親の口から言うのも変ですが、あの子は小さい時から聞き分けのいい素直な子でした。その勝が去年の暮、こんな



筆者撮影

うを食べながら、いつまでも勝君の話をしていた。

今はあの北山内科医院も、おいしいみそまんじゅうの田中屋もない。台場そのものすら跡形もなく、ただドック会社敷地内の片隅に「弁天台場跡」と書かれた小さな古い角材が一本、強い浜風になぶられながら頑張っ立っているのが目につくだけだ。

ことを言っただけです。

『父さん僕教員になるのをやめるよ。医大に入りなおして父さんの跡を嗣ぐ。教員も好きだけど医者になって病氣の子供達を治してやりたい』と。

喜びましたねえ。私の後嗣ぎが出来ましたので、その晩は家族で祝杯をあげました。初めて飲んだコップ半分程のビールに顔を赤くしたあの子は『僕はやっぱりこっちはいい』と言って大好きな大黒町田中屋のみそまんじゅうを二つも三つも食べていました。そして、『父さん僕とてもいい所を見つけたんだ。そこに僕だけの基地、台場基地と言う名前をつけたんだよ。去年の春から気の落ち着かない時はそこへ行くことに決めてたんだ。静かに雨の降る日は特にいいねえ。父さんも知っているでしょ。お台場、弁天のお台場さ。あそこにある家の二階の階段下なんだけど。考え事や悩んでいる時、悲しい時や嬉しい時等心に乱や重荷がある時は、あの階段の下でじいっと海を見ていると、心がとても軽く爽やかにって落ち着くん。静かな時の海っていいよね。鳥がいて、船がいて、釣人がいて。おだやかな波は不安といらだちを持ち去り、安心と落ち着き、満足を運んでくれる』

と半分は自分に言い聞かせているように、ゆっくりゆっくりと言うんです。そして『父さんも一度僕の基地へ行ってみたら』と言ったので、私も一度来たことがあるんです

よ。その日からあの子との会話はいつもお台場の事、基地の話なんです。よほど気に入った所だったんでしょね。病氣が治ったら一緒に僕の基地へ行こうって約束をしていたのですが、今年の六月、勝は昇天してしまいました。教員にもなれず、医者にもなれず、短い一生でした。生まれた時に持ってきた自分の時間を使い果たしたんでしょか。それにしてもあまりにも短かった……。

今日は勝の大好きだった一人だけの根城、台場基地へ行こうと家内と話し合っ来たんです。あの子が言っていました。

『少し雨の強い日や風のある時、基地のおばさんは中へお入りって二階の戸を開けてくれた。何も聞かず、何も言わず、いつもただにこにこして声をかけてくれた。静かな親切ってうれしいよね、本当に有難かった』と。

その節はまことに有難うございました

こぶしで涙を拭いながら話す父親、ハンカチで顔を被った手が細かくふるえている母親。

手土産は勝君が大好きだったという大黒町田中屋のみそまんじゅうだった。

私の住んでいた弁天台場には、数多くの逸話が残る。それにしても彼はいい名前を付けてくれたものだ。お台場基地とはひそかに夢をはぐくむ秘密の場所なのだ。

その夜の私達は、お土産に頂いた田中屋のみそまんじゅう



瀧沢 鈴

たきざわ すず

1926 函館市で生

まれる

1941 教職につく

1971 教職を退職

2014 読み語りの会「花音」にて

ボランティア活動し現在に至る

文芸思潮エッセイ賞

入選 1回

佳作 3回

奨励賞 2回



受賞の言葉

瀧沢 鈴

励みとなる大きな賞をいただきとても嬉しく感謝致しております。誠にありがとうございました。

八十八歳から好きで書き始めたエッセイも、もう十年も経ってしまいました。残り少ない持ち時間の身ですが、これを機会に今少し努力をして半歩でも前進したいと考えております。

このたびは本当にありがとうございます。重ね重ねお礼を申し上げます。

ひとつの約束

小林宏子



昭和十九年太平洋戦争が益々激しくなる中、死んでも帰れぬニューギニアに出征する父の見送りに三十四歳の母と七歳の兄、一歳半の私は母の背中で春の姫路港にいた。

気性の激しい母は突然「子供達と川に飛び込んで死んでやるから」とやり場のない怒りを父にぶつけていた。

「そんなことを言わないで、子供達は叱らないで優しく言い聞かせて大切に育ててくれ、もしも私が死んだら高野山に骨を納めてほしい」と懇願するように父は伝えていた。母の心臓の鼓動は背中にいる私にまで響いてくるようだった。

父は前夜、他の女性と過ごし、また、その女性は見送りにも来ていたようだ。

そんな言葉を交わし、父は人間が造り出した戦争という巨大な地獄に吸い込まれていった。どんな気持ちで輸送船に乗り込んだのであろうか。誰もが逃れることのできない時代の大きな波に翻弄されながらも、必死にしがき生き抜いた時代だった。

遅れていたら私達も死んでいたと母は語っていた。

父小林槌三郎は明治三十五年岡山県児島半島の胸上村で誕生した。子供の頃は翡翠色の瀬戸内海の胸上浜で押し寄せる波と戯れていたのだろうか。海の向こうに夢を抱いて十八歳の時に神戸に移り、その後大阪で服飾デザイナーとなり、明治三十七年生まれの母町田マキと結婚して一男二女が誕生した。昭和十六年十二月真珠湾攻撃から始まった太平洋戦争、その十一月後に誕生した私に、何事にも負けない人間になってほしいとの願いを込めて小林宏子と二十一格の強い名前をつけてくれた。可愛い子供服を父がデザインして母が仕立てる。両親にとって戦前のそんな幸せな時代は長くは続かなかった。

初めて高野山を訪れたのは、平成十五年春、戦死した父と波乱万丈の人生を一〇一歳まで生き抜いた明治生まれの母の写真を持って、ある宿坊に泊まった。

午前五時から始まる読経の中、二メートルもある阿弥陀如来の懷に抱かれるように両親の写真は置かれた。

外は暗く燃え上がる太い蠟燭のもと五人の僧侶達による力強いお経が始まった途端、足の裏から突然温かいものが湧き上がり身体を突き抜け涙がほとばしりだした。ハンカチは忽ち濡れ、隣の女性がソツとハンカチを差し出してくれ

父を見送った三人は大阪旭区の自宅にやっとの思いで辿り着き、母は玄関にヘナヘナと倒れるようにしゃがみ込み暫く放心状態だったらしく、向かいに住む坂さんが「一体どうしたの」と声を掛けてくれたほどだったらしい。

父は一ヵ月程かかるニューギニアへの上陸までの間に立ち寄った港で母への葉書を託した。「すまなかった。帰ったら真面目に生きてお前達を大切にします」そんな内容だったと私が還暦を迎えた頃、兄は話してくれた。父の美しい字は今もはっきり覚えていて。身体の弱かった父に船底の環境がどれだけ残酷だったことが。

日本を発つて三ヵ月もしないうちに熱帯雨林で伝染病にでも罹ったのかジャングルでひとり息を引き取ったのは三十七歳だった。

その後、大阪も益々空襲は激しく食糧事情も悪くなり、私達は祖母の住む北海道雨竜郡一己村に疎開した。昭和二十年三月から大阪の街は、米軍のB29爆撃機が飛来し街は壊滅状態になり一万人以上の市民が亡くなり、疎開が半年

た。泣くことなんか、すっかり忘れていたはずなのに、何故かその涙で清々しく優しい気持ちになった。

歳月が流れ兄も亡くなり弘法大師生誕千二百五十年にあたる令和五年、再び新緑の美しい五月に父との約束を果たすため高野山に登ってきた。平清盛が奉納した血曼陀羅のただならぬ気配が凛と伝わり身も清められる心持であった。この聖地には、平安時代に遡り父の出身地岡山の先祖達が葬られている。

奥の院で納骨の手続きをした。受付の僧侶からは「一度納骨を頂くと如何なる理由があろうとお返しすることができませんが、宜しいでしょうか」と丁寧な説明を受け、申込書に署名をして納骨代を奉納し奥に通された。荘厳な本堂の空気の中で、納骨する人達が横一列に正座して静かに待った。

立派な袈裟を纏った高僧により読経が始まり順番に焼香をした。広い本堂に響きわたる大きな声で両親と私の名前が読み上げられた時「ああ、これでやっと両親の子供になったのだ」と感慨深く身体が熱くなった。

やっと高野山に両親と一緒に眠ることができる。

父が戦地に発つときの言葉が遺言となり、母は自分が生きていくうちにその約束を果たせなかったことを亡くなるまで気に掛けていたので、その約束を果たすことができて

私は安堵した。約束から七十九年もの長い歳月が流れ私は八十歳になっていた。

納骨が終わった後、一二一〇年鎌倉時代の尼將軍北条政子が源頼朝と息子実朝を弔うため建立された金剛三昧院に宿泊した。国宝を所有する唯一の宿坊で丁度満開を迎えた石楠花が咲き誇り見事な庭園で、余りの美しさに遠方より訪ねてくるカメラマン達は後を絶たず敷地内は賑わっていた。高野山の五月は寒く、お風呂上がりの私はお布団にくるまり早々と眠った。

翌朝五時からの説経が終わると愛染明王の前で御住職の説教が始まった。年齢は七十歳ぐらいで人情味が溢れ、茶目っ気もあり、十年程前に草履しか履いたことがない自分が、雪解けの札幌に行き足元がぐちゃぐちゃになり往生した話や政府から突然世界遺産に指定され、どうして良いのかも分からず、お金もようけ掛かって困ったことなど、色々な話を聞くことができ住職に親しみを持てた。

境内には白い犬が放し飼いされていたが、宿坊を後にする時、愛らしく尻尾を振って見送ってくれた。

私は宿坊に別れを告げ、七十九年前に父を戦地に見送った姫路港に向かった。瀬戸内海に面した姫路港は日本の繁栄の源であったことが想像できる活気あふれる大きな港だった。昭和十九年春、激戦地ニューギニアに出征する父の

薨は村松友規の小説「サイゴンティをもう一杯」にも登場する。

多くの人達の苦しみや哀しみは時空を超えて、大きな海は全ての世界を優しく包んでくれる。

「愛だよ愛、もつともつと皆が愛しあつたら沢山の問題なんて解決できる。そして世界はとびつきり面白くなる」とルイ・アームストロングは言っている。ルイは六十六歳を迎えた頃、心臓病を患いながらも希望の歌をうたい続け、熱いメッセージを世界に届けた。そして、人々の心は彼の歌に救われた。

父と一緒に生きてこれなかった分、人の温もりと優しさの中で多くの景色を見ることができた。今迄、お世話になった人達にこれから、どれだけの恩返しができるのか。花の生命力に自分を託して雑草のように生きてこれたのは、父の熱い願いだったと思う。

昭和十九年、父から母に託された約束を果たすことができた。家族の絆は紡ぎ続ける。

泥にまみれて美しく咲く蓮の花のように、私も命ある限り娑婆の泥にまみれながら咲き続けたい。

父の細い小指に私の逞しい小指を絡めて約束をした。万華鏡のような私の人生は、今また、ここからスタートですよ。幸せになりますと。

見送りの時は、母と兄と三人だったのに、今は一人で港に立っていた。港のターミナルで何処に行こうかと調べていると、小豆島が目に残り心がときめいた。小豆島を舞台に高峰秀子扮する国民学校の大石久子先生の映画「二十四の瞳」を小学生の時に観たことが懐かしき思い出されたが、時間的に無理なので真浦行の遊覧船に乗った。小さな船の固い椅子に座り波に身を委ねてほんやりと遠くニューギニアの方を見ていると、ふっと隣に父がいるような気がして、小さな声で「おとうちゃん」と呼んでみた。

その瞬間、温かい風が頬を撫でた。

洋服で多くの女性や子供達に生きる力を与えた父の人生は短かったけど、自分の夢を叶え幸せだったのだと想像する。お洒落な背広にネクタイ、烏打帽をかぶりステッキを持ち、三十人位の縫い子さん達の真ん中にいた父は凄く輝いていて、私の誇りでもあった。

バイオリンを弾き、ビリーヤードに興じた父にはピッタリの曲、ルイ・アームストロングの曲「この素晴らしき世界」をごつごつとしたルイの歌声とトランペットの音色、そして幻の薔薇ブラックティを添えて瀬戸内海の港から波にのせて贈ります。ブラック珈琲の香りが鼻を擽るような、この濃い茶色の薔薇ブラックティは昭和五十年創業、篠宮薔薇園が発明して、平成の初め全国の花市場に登場し、余りの薔薇の美しさに多くの人々が虜になった。また、この薔

おとうちゃん、たくさんたくさん ありがとう。
やっ と おかあちゃんと一緒に居られるね。



小林宏子 ことばやし ひろこ
1960 北海道立奈井江高校卒業
北海道開発局
72 ギャラリー鷹
75 喫茶店開業
87 花屋 花は・はなみち・夢・カレッジ開業
有限会社はなみち代表取締役
現在に至る

受賞の言葉

小林宏子

心待ちにしていた封書をドキドキしながら、そっと開けてみると、赤い文字が目飛び込んできて、間違いではないかと見直して見ました。
フランスのルルドの泉のように止めどなく希望が湧きあがってきて、一〇〇歳まで書き続けようとの目的と目標がはつきり見えてきました。
感謝致します。

「団子ちゃん」は何者？

林 須磨

Essay

昨年七月、娘とともに老人ホームに入居した。酷暑だった。最低限の荷物は何とか運び終え、さあこれから終のすみかと考えながら、余生を楽しもうと思っていた入居一ヵ月後の八月二十二日、娘の右足の付け根付近が俄かに痛み出した。オペラアリアの発表会の二日後のことだった。次第に痛みがきつくなり、右足から転ぶようになった。神経も麻痺して来て歩けなくなった。あついに来たのか。その痛みの原因を何となく分かっていったからだ。それは二年前に遡ってのことだった。

定期健診で超音波検査の時、エコーの技師は「お腹にポツンと小さな塊がありますね。おそらく脂肪の塊だと思われます。でも、誰にでもありますよ、何のことはないでしょう」で済んでいた。そして、健診から二週間後、娘は二度目のコロナワクチンを接種した。まもなく、娘自身何の自覚もないままその塊が大きくなったらしく、妊娠八ヵ月位のお腹になってしまった。驚いた娘はかかりつけのク

リニックで診てもらったら、医師も驚いてすぐに大きな病院を紹介した。しかし、その病院も「うちでは分からない、手術出来ない」と。そこで大病院の泌尿器科を紹介されたが、泌尿器科の若い医師たちも「こんな病氣診たことない」とか「ガンだ、手術をしても再発する」などと、結局整形外科に回され、終始そこで世話になることになったのである。

最近の医者は触診をしない。代わりに先端の医療機器やコンピュータを駆使して診察するらしい。レントゲンやMRIによる画像分析が行われた。結果は悪性の腫瘍でないことがわかりひとまずホッとはしたが、三ヵ月毎の経過観察が必要になった。

病名は「脂肪肉腫」と告げられた。我が家では、この塊を「団子ちゃん」と呼ぶことにした。オペラの友人たちは細身だから大きなお腹になればすぐに目立つが、娘は太っているので人目には分からないまま二年が経過したのだ。

MRIで発見された時、すぐに手術するよう勧められていた。だが、健康で無傷の体にメスを入れるといきなり言われても決断がつかず、迷い続けて二年間放っていたのだ。

そうとはいえ、その二年間は「団子ちゃん」に良いと思われることを色々試みたつもりである。テレビや雑誌から多くの情報を得たり、民間療法で薬草を煎じて飲んだり、コンニャクやビワの葉も試みた。その甲斐あってか、二年間、「団子ちゃん」に大きな変化はなかった。そのうち自然に小さくなってくれるかもしれない、また、是非そうなることを願ってきたのである。そして、毎日「団子ちゃん」に声をかけた。

「団子ちゃん、いい子だね。おとなしくしててね」と娘は自分のお腹を優しく撫でて可愛いがってきた。

それでも、右足に麻痺が起こったからには「団子ちゃん」をお腹から取り除いて右足への神経の圧迫を解消しなければならぬ。身体にメスを入れることに抵抗して粘って来ただけに、心は揺らぎながらも、「団子ちゃん」の切除へと気持ちが傾いていくのだった。

再び手術を勧められた時、ついに手術に踏み切った。しかし、手術を希望すると申し出た頃から、主治医の言うことが変わって来た。

「この腫瘍は悪性の可能性がある。病名の『肉腫』は筋肉

などに出来たガンであり、悪性の脂肪肉腫である」

別の整形外科の医師から話を聞いてみたら、悪性腫瘍の手術の場合は、良性と違って広範囲に身体組織を削り取る必要がある。「団子ちゃん」だけでなく周辺の臓器や神経、血管、骨などにもメスが入ることがあるとのこと。娘の主治医からはそういう説明はなく、いきなり、「大腸を切除します」とか言われたこともあったという。また、かかりつけの医師からは、「腫瘍以外に周辺の組織や器官を切除するというのは、転移している可能性があるのかもしれない」と言われた。

手術に臨むに当たり、これらのことを聞かされた娘の心は穏やかではなかった。

娘の心は俄かに荒れだした。特に夜になると眠れないとか、怖い夢を見てうなされるとか、毎晩訴える。母親の私に対して暴言を吐く。私はその度に驚いて、自分が何を言ったのか思い出せなかったが、言った言葉が無情のように聞こえたのか、私は一人では歩けない娘の手を掴みながら心で泣きながら歩いた。娘は仮に手術をしても健常ではなくなるだろう。車椅子の生活になり、トイレも食事も介助が要るようになるだろう、そういう覚悟が要るのだらうと思った。

こうして、毎日悶々とした日々が続いた。聞く私も辛い娘はもっと辛いだろう。自分に置き換えて考えてみるの

「団子ちゃん」は何者？

だった。娘は可愛いが極端に憎いことを言うことがある。そんな時、私も決まって憎くなる。すると、私の心にある後悔が顔を覗かせた。あの時の環境が悪かったと自分を責めてしまうのだった。

一人っ子で淋しかっただろう。鍵っ子にして働いた。ベニヤ板の三畳一間で親子三人の生活、あんなにまでして働いたが、もっと他に道はなかっただろうか。私は両親のいる故郷鳥取で出産した。もっと両親のもとで長く育てれば良かった。そしてら父母のいるゆとりとした環境で成長していただろう。大切な成長期をどこかで我慢させていた。それでも淋しさを表に出すことなく、成績も良く、国立大学、大学院を修了した。就職も大学に残るか、企業に就職するか、それとも、賑やかな職場を選んで高校の教師になり、親としては嬉しい門出だった。

入院が近付いて来ると、娘の様子は幾分落ち着いて来た。老人ホームの職員さんや友人たちからの励ましもあった。娘はお腹を撫でては「団子ちゃん」に話しかけていた。「立つ鳥跡を濁さずだよ」と、卒業前の生徒に言うように、「団子ちゃん」のことをいつも願っている姿を見ると、早くなんとかしてあげたい気持ちだった。

いよいよ、入院の準備を始め出した。抱いて寝るためのぬいぐるみの亥の子ちゃん、あなごちゃん、そして病院のような陰気な所ではと真つ赤なシャツやキャラクター柄の

ああ、私は何と往生際の悪い人間だ。自分が嫌になった。そこで私は何よりも刺激を与えないように、ただ「行つてらっしゃい」と笑顔で見送った。

私には神頼みしかなかった。父が仏壇の前でしていたように、病院の薄暗い片隅で般若心経を唱えた。それから、母が唱えていた観音経も唱えた。夫は神道なので祝詞もあげた。

四時間程様子、腰が痛くなって立ち上がった。手術は六時間の予定なので、まだ終わっていないと思ったが、どんな様子かと近くまで手を擦り足を擦る思いでそおつと行つて窺った。すると「手術は済みましたよ」看護師の明るい声、娘はベッドに横たわっていた。娘は生きていた。本当に生きていた！ 無事だったのだ。私は思わず深呼吸をした。麻酔も切れ、両手両足は拘束されたままだが意識もすっかりしていた。予定より二時間も早く終わったのである。手術は成功したのだ。看護師さんも結果が良くて喜んでくれた。手術に立ち会った若い医師がデジカメで「団子ちゃん」の姿を見せてくれ、執刀された先生は優秀な先生だったと説明してくれた。後に主治医は「団子ちゃん」の原寸大のコピーを渡し、重さは二・二キログラムと教えてくれた。

後で聞いたのだが、手術が終わった瞬間ライトが灯り、大勢の看護師さんたちがわーと歓声を上げて喜んでいたら

靴下など元気の出るものを選んで揃えていた。また、私には遺言書を渡された。もしもの時にはと、貯金はこれこれ、お母さんの保険はこれこれ、入院の際の保証人のことなどなど。私は娘に限ってそんなことは決してない、娘は運の強い子だ、きっと何かが守って下さると信じていた。一方、娘は「団子ちゃん」が出来た原因はワクチンのせいだと言いつつ切っている。私はかかりつけの医師に尋ねたが、「ワクチンのせいではない」ときっぱり言われるし、娘も「そんなこと、国の政策だから、医者が認める訳ないでしょう」と弾かれる。こんな時、私はどう慰めたらよいのだろうか。下手に言い返そうものならとんでもないことになる。分かってきっている。だが、辛い気持ちで慰める言葉を探していた。そして、手術の前日を迎えた。老人ホームからは大学病院は遠くて間に合わないで、娘が最寄りの駅前のビジネスホテルをネットで探して予約してくれ一泊した。

翌手術の日の朝は冷たい時雨が降っていた。雨なので来るタクシーは皆「乗車」。ようやく来た空車に乗り大学病院に直行、手術が始まる時間に間に合った。娘は落ち着いて静かに待っていた。

こんな時に私は「本当はメスは入れたくなかった」最後の愚痴だった。

「今更何言うの、もう、決めたことだ。もう、言わんとつて、お母さんの悪い癖だ。悔いはない」

健康な臓器を傷つけることなく、鼠径部の靭帯の修復があったが、運動神経など切断することなく「団子ちゃん」だけを取り出すことに成功したのだ。

「団子ちゃんはお行儀が良かったんだね、素直な子だったんだね」

娘の顔にいつもの笑顔が戻って来た。病院の新館の大きな窓からは、一面広大な北山連邦が眺められ、晩秋の紅葉がひととき美しく眺められた。

夕刻、病院を出てJR駅に着いた。老人ホームの送迎バスは既になく、タクシーで帰ったが、遅かったので職員さんたちが心配されていた。予約していた夕食を運んでもらい、すぐ床についた。翌朝目が覚めると、玄関の鍵を外に掛けっぱなしにしていた。疲れていたので全く気付かなかったらしい。

娘の術後の回復は早く、二週間で退院した。手術痕はかなり大きいですが、日常生活に特別支障はなく、元気に歩き出した。

私たちのいる老人ホームの入居者は五百人程だが、毎朝夕、食堂や通路などで笑顔で挨拶を交わし、賑やかで楽しい。私が一人の時も色々声掛けしてくれた。ここは娘の臨む大世帯であり、入居して本当に正解だったと思う。

そして、「団子ちゃん」は無事卒業してくれた。「団子ちゃん」の正体は一体何だったのだろう。娘のオペラ友達は何

乳を取る

三浦みな子

三十七歳の秋、私は乳がんの告知を受けた。まさかこの年で病気になるはずがない。そう過信していた私の目を見て、医者のはっきりと「悪性でした」と言った。悪性度、ステージ、サブタイプ、抗がん剤、放射線、手術、転移、MRI……。馴染みのない言葉を聞きながら、だんだん診察室の空気が薄くなったように感じた。優しそうな看護師の顔がムンクの叫びのように歪んで見えた。私の心臓は誰かにハッキングされ、意味不明に高速なビートを刻み続けた。こんなはずはない。きつと何かの手違いで私と他人の人生がスイッチしてしまったのだろう、と思った。でも、それは紛れもなく私の検査結果だった。私がこれから引き受けていくものだった。

なんとか自宅に帰り、家族に検査結果を伝えた。私は自分の病気のことで誰かを動転させたり、傷つけたりはしたくなかった。だから、できる限り冷静かつ沈着に事の顛末を話した。家族にも、できる限り冷静かつ沈着に受け止めてほしかった。でも母は号泣し、父は天を仰ぎ、夫は浴び

るように酒を飲んだ。四歳の娘だけが普段通りお飯事に興じていた。さすが私の娘だと思った。

夜、布団に入ると、夢の中に死神が現れた。ローブ姿に大きな鎌を手にはしていた。西洋絵画に出てきそうなベタな死神だ。でもよく見ると、纏っているのはローブではなくパーカーだった。しかも「THE NORTH FACE」という人気ブランドのロゴが刻印されていた。大きな鎌はさほど大きくなく、死んだ祖父が草刈りで愛用していた、のこぎり鎌だった。やけにカジュアルな死神だった。

でも侮ってはいけない。彼はこれまでどんな獲物も仕留めてきたのだ。そんな自信と誇りがそこかしこに漂っている。今度の標的は私だ。奴には分かっている。次に狙うべき獲物が何かということ。

目が合った瞬間、死神は私を追いかけてきた。私は走った。走って、走って、走りまくった。死神はなおも追いかけてくる。私は焦った。髪の毛は逆立ち、額からは汗が吹



林 須磨

はやし すま

1932 名古屋市生まれ、戦後両親の故郷鳥取で青春を送る
立命館大学卒業、元公務員
城陽市の同人誌に所属（現在廃刊）
文芸思潮に応募を重ね、現在に至る
昨年、老人ホーム入居

受賞の言葉

林 須磨

この度は優秀賞を頂きありがとうございます。私の名は「須磨」と云いますが、漢文を教えていた父が「須磨くべし」と付けてくれました。現在脳梗塞のリハビリの中ですが、これからも時間をかけて須磨からく磨いて行きたいと思っています。

選考委員の先生方をはじめ関係の皆様にご心から感謝申し上げます。



カンボジア難民ボ・シティの悲劇
本体価格 1,700 円＋税
御注文はアジア文化社まで



第7回健友館文学賞大賞受賞!

「彼らは何を
語りたかったのか」

砲撃のカンボジア難民の悲慘を描く
本体価格 1,700 円＋税
御注文はアジア文化社まで

き出し、霧のような鼻水と涎が顔に散らばり、生ぬるい涙で視界が滲んだ。もう長く生きられないかもしれない。家族を遺して先に死ぬかもしれない、と思った。

手術の朝。

私は手術着に着替えて狭いベッドに横たわった。左腕には犬のリードのような点滴が繋がれていた。帽子を脱いだ頭には疎らな毛が残っていた。除草剤をまいた後の芝生のようにだった。眉毛もまつ毛も陰毛も失った体は不自然にツルツルしていた。胴体は痩せて厚みがなくなり、かまぼこ板のようであった。半年にわたり抗がん剤を投与した体は、どこからどう見ても私の体には見えなかった。

時間になると手術室へと運ばれた。部屋に入ると医者と看護師が待っていた。医者は「本人確認のため、名前と生年月日を教えてください」と言った。私は正直に私の名前と生年月日を言った。でも本当に自分の体なのか今一つ自信が持てなかった。でも名前と生年月日により確かに私の体であることが認められた。やはり私が手術を受けるのである。「今から麻酔が入ります」と言われた。最後にもう一度、失われゆく右乳房を見ておこうと思ったが、二秒後には意識を失っていた。

生きるのが下手くそだった。いつも気負ってしまい、戸

でも、育児は上手くない。娘がなぜ泣いているのか分からず、遂方に暮れ、無の境地で神に祈り続けた日々だった。育児には正解がない。周りからのアドバイスと現実があまりにも乖離していた。「母親の抱っこが一番安心できる」と誰かに言われても、娘は私の抱っこでも泣くし喚く。「母親は少しくらい寝なくても大丈夫なホルモンが出るらしい」と励まされても、睡眠不足で頭には常に霧がかかっている。「授乳は赤ちゃんとのスキンシップ。母乳で育てましょう」と推奨されても、乳首を嘔まれる授乳は痛くて苦痛であった。

私はとんでもない過ちを犯したと思っていた。今まで熱帯魚、鶏、ウサギしか世話をしたことがないのに、人間の赤ん坊という次元の違うレベルの責任を無責任にも引き受けてしまったのだ。しかもこの責任は娘が成人するまで続くのだ。

娘が生後六ヵ月になったころ、未知のウイルスが出現した。得体の知れないウイルスに罹患する恐怖が新たに加わり、日常生活に嫌な緊張感が高まった。外に出かける機会も減り、狭いアパートの中で娘と二人きりで孤立していた。娘が大きくなると楽になったこともある反面、新しい試練も出現した。娘は保育園から帰りがらなかった。園庭で一時間は遊び倒した。いつもと違う道を通ると大泣きした。こだわりが強く、思い通りにいかないとすぐに癇癪を

惑い、失敗し、失望する。その繰り返しだった。いつも本番で転んでしまう。そういえば、子供の時のピアノの発表会も本番で必ず失敗するタイプだった。どんなに練習しても本番の独特の空気に飲み込まれてしまい、なんだかフワフワと浮かれた気分になり、手が滑ってしまうのだ。そんなことから、母親が苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、先生にはつまらない生徒として見限られ、学年の違う男子に嘲笑されるのだ。

人生は本番の連続だった。

娘が生まれたのは四年前。ふにゃふにゃの肉塊を抱き、この子を何としても守らねばと思った。あまりにも強く思いついで、歩く戦闘機のように常に神経が高ぶっていた。夜になっても眠れない。目をつむると、娘が側溝に落ちたり、玩具を誤飲したり、ベランダの柵から落ちたり、うつ伏せになって息ができなくなったりする様子が浮かんでくるのだ。

世界には恐ろしいものがたくさんあった。窒息、発熱、嘔吐、やけど、お漏らし、鼻血、夜泣き。あらゆる危険を察知し、起こりうるトラブルを予測し、娘を守ること。最新システムを備えた自動車の宣伝文句みたいな言葉を、母として自ら体現しようと思っていたし、それが私の使命であるとも信じていた。

起こす。お風呂イヤ。寝るのイヤ。片付けイヤ。歯磨きイヤ。おしっこイヤ。ごはんイヤ。パンはイヤ。帰るのイヤ。全宇宙の全事象について「イヤ」という2音で表現する二歳児に振り回され、消化できないストレスが溜まった。独立した意思を持った小さな存在が可愛いと思うのと同じくらい憎らしかった。覚えたばかりのたどたどしい言葉が愛くるしいと思うのと同じくらい腹が立った。何より娘に対してそんな風に思う自分がイヤだった。

毎日が本番だった。

仕事・育児・家事。いつも時間に追われていた。いかに効率的に日常を送りするか。それが私の最重要事項だった。料理は人間が食べられるレベルのものを短時間で準備することしか念頭になかった。家の掃除はアレルギー症状が出ない程度に埃を除去するので精一杯であった。子育てに理解のある職場ではあったが、時短勤務を取得しているせいで他の同僚に負担をかけており、負い目を感じていた。とはいえ、定時まで残って仕事ができるほどの余裕は体力的にも精神的にもなかった。長時間労働で疲弊している夫が休んでいるとつい責めてしまうこともあった。土日は疲れて暇さえあれば横になっている状態だった。ワークライフバランスという言葉が提唱されていたが、私の日常では、ワークもライフも重たい漬物石のように私の両肩に

西日

宮尾美明

わたしは、わたしの年代ではそれが普通の一主婦だった。それなのに三人の子育ての真っ最中、突然いても立ってもいられなくなつてラストチャンス試験に挑戦した。当時教員採用試験の年齢制限は三十四才だった。運良く採用されたが、臨時免許で別の教科を受け持つことが当たり前だった。

校長から「何ができますか？」と聞かれ、答えに窮していると「何が好きですか？」思わず美術ですと答えていた。好きなことと教えることはまるで別で案の定、

「先生絵のこと何も知らないの」
中学校の生徒に言われ、身が竦むような恥ずかしさを覚え、すぐに通信で美大に入学した。通信教育がどんなに過酷なものかは入るまでまったく知らなかった。再提出に続く再提出、成績は勿論最低のCマイナス。何度もやめようと思つたが、途中で投げ出すことはいやだった。何より多少とも自信があつた絵だが、美大に入学してこの世には星の数ほど上手い人がいるという現実打ちのめされた。三十半ばで新任教師になり、あげくに通信教育まで始め、三

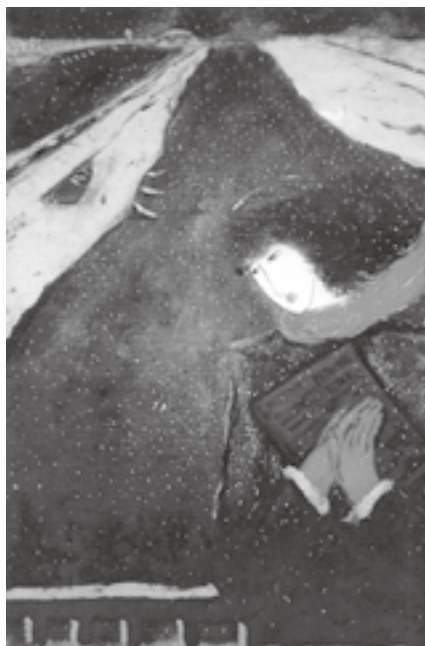
人の子育て真っ最中だったわたしは完全に行き場を失つていた。何より大好きだった絵が大嫌いになり、狂つたような忙しい日々の中でいじけていた。何もかも中途半端。投げやりになつていても投げ出せない子育てとやり始めたばかりの仕事の間で、自分は最低の人間だと思つていた。美術の免許を手にしてから半年の間全く絵を描かなかつたが、そのあとで今度は無性に描きたくなつた。どこでも良かった。一番手軽な文化センターの門を叩いた。そこで出会つたのが最高の先生と絵の仲間だった。そして純子^{じゅんこ}だった。

「あら、家が近いのよ。わたしとあなた」
純子が近づいてそう言つた。教室は思い切り西日が当たつていた。まぶしすぎて目が開けられないくらい強い西日だった。その西日の中でふわふわのソバージュの髪がまるで黄金の稲穂のように揺れていた。彼女は西日のを浴びて微笑む女神だった。女らしいふくよかさと優しさとも美しさ、わたしのとげとげしい気持ちをふんわりとつんでくれそうに思えた。そしてその通りだった。わたし以外の誰もが西日のようにちよつと厄介ではあるが温かい優し

さを持つていた。直射日光でないその日差しはむき出しの尖^ほつたわたしの心を癒やしてくれた。先生もそうだった。みんな優しくかつた。なんでわたしはあんなにとんがつてたのだろうか、年老いた今でもよく分からない。とんがつていつも精神がズキズキドクドクと血だらけになつていたわたしは週一回のこの教室の仲間との出会いと、何より彼女との日々がまるで荒々しい獣同然であつたわたしの心を正常に戻してくれた。私はこの西日のふんだんに当たる教室が好きだった。鋭角でない鈍角でもない全てが平面の西日の教室の仲間の顔は、なぜかぼんやりとしているのに、全員が優しい笑顔だった。そんな中で支えられてわたしは自分を許せるようになっていった。そうなんだ、多分自分を許せなかつたんだと思う。何もかも中途半端で何かもない加減で何かもやりきれなかつた自分を憎んでいたのかも知れない。あらゆる物を夢幻のように包む西日の中で、温かい仲間の笑顔と途切れない会話がわたしの心を平常に戻してくれたのだと今ではよく分かる。

わたしと純子は教室に来るときは別々であつたが、帰りはいつもいっしょだった。絵よりも多分その頃は教室が終つた後の仲間とお茶の方にみんなは夢中になつていた。大好きな先生と大好きな仲間と、そして純子との帰り道。今でもあの日々はわたしの人生の黄金の日々だったと思う。名古屋から同じ駅までの電車の中の三十分ほどがたまらな

く楽しかつた。何を話したか何も覚えていないのに、純子にとつてはわたし、わたしにとつては純子のお互いの何もかもを心ゆくまで喋つていたのだと思う。お互いに秘密などなく知らないことなど何もなかつた。まるで幼なじみか、姉妹のようだった。六歳上の純子はいつまでたつてもガキのようになつたと違って大人の女性だった。でも、近いことを幸いにお互いの家を行き来し、互いに花が好きなのもあつてよくいろいろなところに出掛けた。名古屋に近いと言っても、まだまだ田舎のこの辺は春夏秋冬花には事欠かなかつた。二人の好きなことはよく似ていた。それでも一見大人の女性のように見える純子は、清らかで純粹だからかも知れないが、なかなか頑固で融通の利かない面もあ



「待つ人」イラスト宮尾美明

り、時には衝突することもあった。でも、いくらケンカしてもどちらからともなく歩み寄って友情が揺らぐことはなかった。

「わたしはね。一回いやだと思って絶交したら二度とその人と友情は結べない」

純子らしくなく口をギョツと真一文字に結んでそんな経験は何度か語り、別れた友人もいたらしい。何度かそんな話を聞いた。私たちの二人の間でも、

「絶交や」「もう顔も見たくない」

という所までいったことがあったが友情が切れることはなかった。仲間との展覧会、二人だけの旅行、互いのたいしたこともない出来事を、いかにも秘密めかして声を落としてひそひそと暗がりです話し、心を通わせた。

純子はまだ若いころから病気がちでよく入院した。お見舞いに行くと、今なら禁止されているカサブランカの花が部屋中にあの香りをまき散らしていた。

「この花大好きなの」

わたしも瞬時にカサブランカが好きになった。その時まで名前すら知らなかったのに。

「憎まれっ子世にはばかる」

純子は、退院の度に決まってそう言って、弱ったところを見せなかった。芯はわたしなどよりはるかに強かった。

病室に西日が当たるなんてことは多分なかっただろうが、

純子の優しいご主人の言葉でやっと会えることになった。わたしの心は弾んでいた。

「認知が大分進んでるので分かるかどうか」

確かに耳が遠い上に認知症も加わっていたのは知っていた。でも、電話で話すのに違和感はなかった。

「息子にも『あんたさんどなた』っていうんですよ。こまっただもんだわ」

ご主人のそんな話を聞いても信じられなかった。久しぶりにやっと会えた瞬間、

「ああ、美明さん」彼女は確かにそう言った。後ろで、何度も何度もご主人が耳打ちしてくれていたらしかったが、それでも行くたびに、

「ああ、美明さん」そう言った。ばかりか、いつ行っても入り口の扉の方を眺め、わたしが手を振るとちゃんと返してくれた。会話はほとんど通じなくなっていた。彼女の耳は一層人の声を通さなくなっていた。わたしの方がもっぱら話しかけるばかりだったが、彼女の目がわたしを認める光を感じるたびに嬉しくなった。朝日がぼんやりと西日のように彼女を取り囲むと、痩せ細った顔や腕が浮かび上がり一層切ない気持ちになった。かつて二人が共有した絵の教室や仲間の話を繰り返した。ホールに響くわたしの声に初めは遠慮していたが、彼女の目になんともいえない懐かしそうな光が宿ると、一層声を大きくして手を握った。純

いつでもやつぱり彼女の背景には西日が差していて、その柔らかい温かい光に純子は包まれているような感じがする。豊かだった髪は繰り返す病気の度に色を変え量を変え形を変えていたにもかかわらず、わたしの中で純子の髪はいつも西日に照らされて豊かで黄金に輝いていた。

「またコーヒー行こう」

二人の馴染みの店の名前を出してそう言った。そしてその通り数え切れないほど喫茶店に向かい合った。どれだけ長い間会えなくても会った瞬間すぐに昨日の続きが始められた。時には薄暗い店もあったが、彼女の横顔には相変わらず西日が差して純子の表情を柔らかくしていた。

わたし三十代、純子四十代の出会いから、あつという間に四十年が過ぎていた。そしてわたしは七十代、純子は八十代になっていた。ここ数年は純子の体調が悪く入院を繰り返してなかなか会えずにいた。その上コロナの時代に突入し一層会うことが難しくなっていた。それでも、時々電話で話をした。二人にとって一番辛かったのは、いくら最高の補聴器をつけても純子の耳は聞き取ることが難しいことだった。ほとんど絶叫に近い声を出さないと通じなかつた。喉がヒリヒリと痛くなったが、それでも声が聞けるだけでお互いに満足だった。

「施設に入所しました。体調も良くなりやっと落ち着いたので会ってやってください」

子は力のない手で握り返した。

そんなある日、いつものように純子に寄り添って腰を下ろすと、

「ほんまにあんたはようきてくれる」

純子がいきなりはつきりと声に出した。

「だって、友だちだもの」

わたしが覗き込んでそう言ったとき、「ほんま、あんたはほんまの親友や」

彼女の声がホールに届いた。ほんまにと親友だわの二語は彼女のどこにそんな声が残っていたのかと思ほどの大きな力のこもった腹の底から出した彼女の全力の声だった。その大きな声は、ホールのみんながギョツとしてこちらを振り返らせる声だった。何よりわたし自身が驚いた。彼女の絶叫に近い叫びだった。そして、細い筋だらけの指に力を込めてわたしの手をぎゅっと掴んだ。

それから程なくして熱を出し病院に入院した。しばらくしてまた施設に戻ったというので出掛けると、目には光が消え、わたしの名前を呼ぶこともなかった。声を出すこともなかった。それでも瞬間わたしを認めると目には光が差し、うつすらと涙があふれ頬を伝う手前で留まっていた。それから間もなくわたしの大切な親友は旅立っていった。



定価 1540 円税込
御注文はアジア文化社まで

お線香を上げながら彼女の写真と対座していると、
ちよっぴり妬ましくなりました。理由は彼女はもう永遠に
それ以上年を取らないのに私は年ごとに老いていくとい
うなんとも不遜な思いです。あまりの暑さに彼女の老いた愛
犬は大の字。まだ子犬でピョンピョン跳びはねていたこ
や、大好きだった絵や花も彼女とともに思い出され切ら
なくなる時間でした。彼女とともに素晴らしい賞を頂きまし
てありがとうございました。

受賞の言葉

宮尾美明



宮尾美明

みやお みあき

洋画家

元中学校教員

ふるさと物語コンテスト優秀賞

食の思い出コンテスト最優秀賞

島崎藤村文学賞佳作

北野財団生涯教育論文2席

シャディ 85 周年贈りものがたり準グランプリ

60 歳からの主張入賞

「文芸思潮」イラスト漫画賞表紙絵部門優秀賞

現代洋画精鋭選抜展金賞

ドローイングデッサン版画コンクール金賞

木曾川風景画優秀賞 他受賞多数

